

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成24年4月1日
(第64期) 至 平成25年3月31日

小野建株式会社

大分県大分市大字鶴崎1995番地の1

(E01324)

目次

頁

表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	5
5. 従業員の状況	5
第2 事業の状況	7
1. 業績等の概要	7
2. 販売及び仕入の状況	8
3. 対処すべき課題	9
4. 事業等のリスク	9
5. 経営上の重要な契約等	10
6. 研究開発活動	10
7. 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	10
第3 設備の状況	12
1. 設備投資等の概要	12
2. 主要な設備の状況	12
3. 設備の新設、除却等の計画	14
第4 提出会社の状況	15
1. 株式等の状況	15
(1) 株式の総数等	15
(2) 新株予約権等の状況	15
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	15
(4) ライツプランの内容	15
(5) 発行済株式総数、資本金等の推移	15
(6) 所有者別状況	16
(7) 大株主の状況	16
(8) 議決権の状況	17
(9) ストックオプション制度の内容	17
2. 自己株式の取得等の状況	18
3. 配当政策	19
4. 株価の推移	19
5. 役員の状況	20
6. コーポレート・ガバナンスの状況等	22
第5 経理の状況	29
1. 連結財務諸表等	30
(1) 連結財務諸表	30
(2) その他	62
2. 財務諸表等	63
(1) 財務諸表	63
(2) 主な資産及び負債の内容	81
(3) その他	83
第6 提出会社の株式事務の概要	84
第7 提出会社の参考情報	85
1. 提出会社の親会社等の情報	85
2. その他の参考情報	85
第二部 提出会社の保証会社等の情報	86

[監査報告書]

[内部統制報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	九州財務局長
【提出日】	平成25年6月24日
【事業年度】	第64期（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）
【会社名】	小野建株式会社
【英訳名】	ONOKEN CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 小野 建
【本店の所在の場所】	大分県大分市大字鶴崎1995番地の1
【電話番号】	097（524）1111（代表）
【事務連絡者氏名】	大分本店長 平山 章公 （同所は登記上の本店所在地で実際の管理業務は下記で行っております。）
【最寄りの連絡場所】	福岡県北九州市小倉北区西港町12番地の1
【電話番号】	093（561）0036
【事務連絡者氏名】	取締役管理統括本部長 小野 信介
【縦覧に供する場所】	小野建株式会社小倉支店 （北九州市小倉北区西港町12番地の1） 小野建株式会社大阪支店 （大阪市西区九条南二丁目24番20号 九条STビル） 小野建株式会社東京支店 （東京都中央区八重洲一丁目3番22号 八重洲龍名館ビル2F） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第60期	第61期	第62期	第63期	第64期
決算年月	平成21年 3月	平成22年 3月	平成23年 3月	平成24年 3月	平成25年 3月
売上高（百万円）	167,751	116,074	133,720	147,942	149,998
経常利益（百万円）	3,454	2,492	3,452	2,646	3,359
当期純利益（百万円）	1,481	1,277	2,160	1,510	3,254
包括利益（百万円）	—	—	2,193	1,532	3,381
純資産額（百万円）	42,725	43,818	45,303	46,275	49,200
総資産額（百万円）	91,703	80,092	92,272	103,559	99,466
1株当たり純資産額（円）	2,061.42	2,109.26	2,182.52	2,229.08	2,369.37
1株当たり当期純利益金額（円）	72.31	61.62	104.23	72.88	157.04
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額（円）	61.97	59.51	104.23	72.88	157.04
自己資本比率（％）	46.6	54.6	49.0	44.6	49.4
自己資本利益率（％）	3.5	3.0	4.9	3.3	6.8
株価収益率（倍）	10.1	13.6	7.5	9.7	5.5
営業活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	1,521	13,650	△5,326	△505	7,632
投資活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	△3,739	△4,191	△2,146	71	△85
財務活動によるキャッシュ・フロー（百万円）	1,289	△9,540	7,387	961	△6,794
現金及び現金同等物の期末残高（百万円）	1,286	1,205	1,120	1,647	2,399
従業員数[外、平均臨時雇用者数]（人）	427 [—]	462 [—]	469 [—]	485 [—]	500 [—]

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 平成21年6月29日に三協則武鋼業株式会社の株式を追加取得し連結子会社としており、貸借対照表については第61期第1四半期連結会計期間末より、損益計算書およびキャッシュ・フロー計算書については第61期第2四半期連結会計期間より連結しております。

3. 小野建沖繩株式会社を平成22年9月7日に設立しており、第62期第2四半期連結会計期間より連結子会社としております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第60期	第61期	第62期	第63期	第64期
決算年月	平成21年 3 月	平成22年 3 月	平成23年 3 月	平成24年 3 月	平成25年 3 月
売上高 (百万円)	156,318	107,369	124,086	133,995	135,862
経常利益 (百万円)	2,694	2,566	3,214	2,523	3,027
当期純利益 (百万円)	1,084	1,393	1,918	1,453	3,377
資本金 (百万円)	3,780	3,780	3,780	3,780	3,780
発行済株式総数 (千株)	21,244	21,244	21,244	21,244	21,244
純資産額 (百万円)	41,389	42,496	43,776	44,681	47,710
総資産額 (百万円)	85,609	74,749	87,951	97,557	95,126
1株当たり純資産額 (円)	1,996.94	2,050.39	2,112.13	2,155.81	2,301.99
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	35.00 (25.00)	20.00 (5.00)	30.00 (15.00)	22.00 (12.00)	30.00 (12.00)
1株当たり当期純利益金額 (円)	52.91	67.23	92.56	70.12	162.93
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	44.31	64.95	92.56	70.11	162.93
自己資本比率 (%)	48.3	56.9	49.8	45.8	50.2
自己資本利益率 (%)	2.7	3.3	4.4	3.3	7.3
株価収益率 (倍)	13.8	12.5	8.4	10.1	5.3
配当性向 (%)	66.2	29.7	32.4	31.4	18.4
従業員数[外、平均臨時雇用者数] (人)	387 [-]	377 [-]	381 [-]	391 [-]	434 [-]

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 第60期の1株当たり配当額35円には、設立60周年記念配当10円を含んでおります。

3. 平成25年3月1日付で、提出会社の完全子会社である横浜鋼業株式会社を吸収合併いたしました。

2 【沿革】

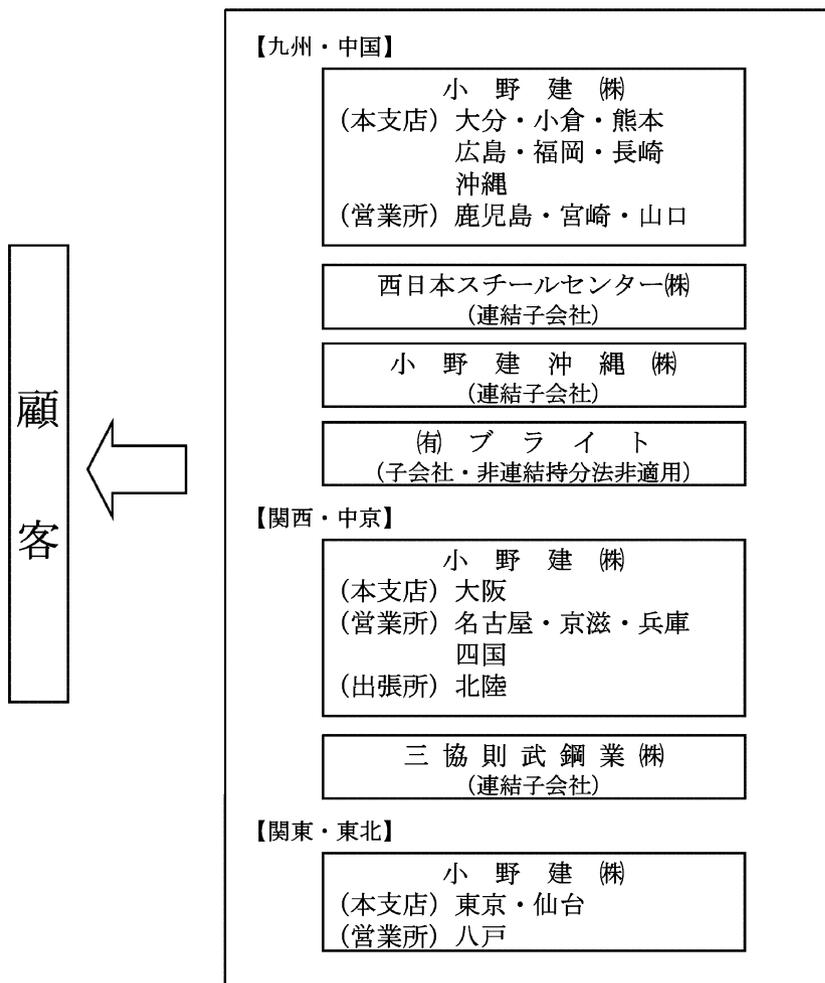
昭和24年8月	セメント、金物、土木建築資材の販売を目的に大分県大分市大字大分1414番地に株式会社小野建材社（資本金100万円）を設立
昭和30年8月	大分県大分市大字大分字南新町2712番地の1に本店を移転し、建設用機械類の販売を開始
昭和32年2月	商号を小野建株式会社に変更
昭和32年8月	福岡県小倉市（現北九州市小倉北区）に小倉支店を開設し、鉄鋼商品の販売を本格化
昭和41年12月	熊本県熊本市に熊本支店を開設
昭和43年11月	大分県大分市大字勢家字京泊1396番地の41に本店を移転
昭和45年6月	広島県安芸郡海田町に広島支店を開設
昭和47年4月	大分県大分市にゴルフ練習場「春日浦ゴルフセンター」を開設
昭和49年8月	福岡市中央区に福岡営業所（現福岡支店）を開設
昭和50年9月	長崎県西彼杵郡時津町に長崎営業所（現長崎支店）を開設
昭和52年12月	大分県大分市に駐車場ビルを建設
昭和58年8月	大阪市西区に大阪営業所（現大阪支店）を開設し、小倉支店および大阪営業所にて鉄鋼商品の輸入販売を開始
平成3年4月	小倉支店内に管理統括本部を設置
平成4年8月	ゴルフ練習場を全面改築し、「マリゼ春日浦ゴルフスクエア」に名称変更
平成6年10月	大分県大分市大字鶴崎1995番地の1に本店を移転
平成6年11月	日本証券業協会に株式を店頭登録
平成7年10月	東京都中央区に東京事務所（現東京支店）を開設
平成11年1月	大阪証券取引所市場第二部および福岡証券取引所に株式を上場
平成13年10月	千葉県浦安市に東京支店浦安センター（ストックヤード）を開設
平成14年8月	北九州市小倉北区に西日本スチールセンター株式会社（現・連結子会社）を設立
平成15年12月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場
平成16年2月	青森県八戸市に八戸営業所を開設
平成16年9月	沖縄県那覇市に沖縄営業所（現沖縄支店）を開設
平成16年10月	鹿児島県鹿児島市に南九州営業所（現鹿児島営業所）を開設
平成16年11月	宮崎県宮崎市に宮崎営業所を開設
平成17年3月	東京証券取引所市場第一部銘柄に指定替え
平成17年8月	仙台市青葉区に仙台営業所（現仙台支店）を開設
平成18年4月	山口県山口市に山口営業所を開設
平成20年3月	横浜鋼業株式会社（大阪市西区）の株式を取得
平成20年4月	愛知県名古屋市の名古屋営業所を開設
平成20年10月	株式交換により横浜鋼業株式会社を完全子会社化
平成21年6月	三協則武鋼業株式会社（大阪府松原市）の株式を追加取得し、連結子会社化
平成22年9月	小野建沖縄株式会社（那覇市）を設立し、連結子会社化
平成23年1月	石川県金沢市に北陸出張所を開設
平成23年4月	滋賀県草津市に滋賀営業所を開設
平成23年10月	兵庫県姫路市に兵庫営業所を開設
平成24年9月	愛媛県松山市に四国営業所を開設
平成25年3月	連結子会社の横浜鋼業株式会社を吸収合併
平成25年3月	滋賀営業所を京滋営業所として京都府京都市に移転

3 【事業の内容】

当社の企業集団は、当社と連結子会社3社および非連結持分法非適用子会社1社で構成され、主に鉄鋼・建材商品の販売および一部工事請負を国内各地域において行っており、各拠点において包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社は、販売体制を基礎とした地域別のセグメントから構成されており、「九州・中国」、「関西・中京」および「関東・東北」の3つを報告セグメントとしております。

事業系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

連結子会社

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
西日本スチールセンター株式会社	北九州市小倉北区	10	鋼板加工業	100.0 (0.5)	鉄鋼商品であります鋼板類を当社等より仕入、それを加工して、ユーザー等へ販売しております。
三協則武鋼業株式会社	大阪府松原市	87	鋼板加工業	84.5	鉄鋼商品であります鋼板類を当社等より仕入、それを加工して、ユーザー等へ販売しております。
小野建沖繩株式会社	沖縄県那覇市	5	鋼材販売業	100.0 (1.0)	鉄鋼商品を当社等より仕入、それをユーザー等へ販売しております。

- (注) 1. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
 2. 西日本スチールセンター株式会社の役員には、提出会社の役員が3名兼任しております。また、主要な設備等は提出会社が賃貸しております。
 3. 三協則武鋼業株式会社の役員には、提出会社の役員が2名兼任しております。
 4. 小野建沖繩株式会社の役員には、提出会社の役員が1名兼任しております。
 5. 西日本スチールセンター株式会社・三協則武鋼業株式会社・小野建沖繩株式会社の3社に対し、資金の貸付を行っております。
 6. 平成25年3月1日付で、提出会社の完全子会社である横浜鋼業株式会社を吸収合併いたしました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成25年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数 (人)
九州・中国	321
関西・中京	127
関東・東北	52
合計	500

(注) 従業員数は就業人員であります。なお、嘱託は含まれておりません。

(2) 提出会社の状況

平成25年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与（円）
434	35才 6ヵ月	9年 6ヵ月	4,379,932

平成25年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
九州・中国	304
関西・中京	78
関東・東北	52
合計	434

- (注) 1. 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。
2. 従業員数は就業人員であり、当社から社外への出向者を除き、嘱託26名は含まれておりません。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1) 経営成績に関する分析

当連結会計年度における我が国経済は、長期化する円高およびデフレ等の影響から先行き不透明な状況で推移いたしました。政権交代に伴う経済政策への期待により円安、株高の動きとなり、景気回復への明るい兆しも見え始めました。

このような環境の中、当社グループにおきましては、従来からの基本戦略である「販売エリアの拡大」と「販売シェアの向上」の一環として、9月に四国営業所を愛媛県松山市に開設いたしました。さらには3月1日に当社の100%連結子会社であった横浜鋼業株式会社を当社が吸収合併したことにより、経営資源の集約による経営の効率化、購買一元化による購買コストの削減、間接部門統合による管理コストの削減を図ることにより関西エリアのみならず、北陸・中国・四国・中部エリアでの顧客に対するサービスの向上と営業力を強化いたしました。業績につきましては、鋼材販売単価は下がったものの、鋼材販売数量ならびに完成工事高が増加したことにより当連結会計年度の売上高は、1,499億98百万円（前年同期比1.4%増）となりました。損益面におきましては完成工事高の増加ならびに販売数量の増加により、営業利益31億57百万円（前年同期比26.4%増）、経常利益33億59百万円（前年同期比26.9%増）となりました。また、当期純利益が大幅に増加した要因は、横浜鋼業株式会社の吸収合併に伴い、法人税法に基づく横浜鋼業株式会社の繰越欠損金を引き継いだことによる法人税等が減少したこととあります。その結果、当期純利益は32億54百万円（前年同期比115.5%増）となりました。

セグメント別の業績は、次のとおりであります。

①九州・中国エリア

前期に対し完成工事高は増加したものの鋼材販売における販売単価が下がった為、売上高は横這いとなりました。利益につきましては完成工事の増加、販売数量の増加ならびに利益率の上昇により増加いたしました。その結果、売上高は881億86百万円（前年同期比1.1%減）セグメント利益は18億51百万円（前年同期比22.2%増）となりました。

②関西・中京エリア

前期に対し鋼材販売数量は増加したものの販売単価が下がった為、売上高は減少いたしました。利益につきましては、販売数量の増加ならびに利益率の上昇により大幅に増加いたしました。その結果、売上高は424億34百万円（前年同期比2.2%減）セグメント利益は6億46百万円（前年同期比144.0%増）となりました。

③関東・東北エリア

前期に対し鋼材販売単価は下がったものの、販売数量が増加したことならびに完成工事高が増加したことにより売上高ならびに利益は横這いとなりました。その結果、売上高は319億56百万円（前年同期比1.3%増）セグメント利益は8億円（前年同期比1.7%減）となりました。

(2) 財政状態に関する分析

①資産、負債および純資産の状況

(資産の部)

前連結会計年度末比40億92百万円減少し、994億66百万円となりました。主な要因は、受取手形及び売掛金、商品及び製品の減少ならびに完成工事高の増加による前渡金の減少によるものです。

(負債の部)

前連結会計年度末比70億18百万円減少し502億65百万円となりました。主な要因は、短期借入金の減少ならびに完成工事高の増加による前受金の減少によるものです。

(純資産の部)

前連結会計年度末比29億25百万円増加し492億円となりました。主な要因は、利益剰余金の増加によるものです。

②キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、短期借入金の減少および有形固定資産の取得による支出が増加したものの、売上債権およびたな卸資産の減少ならびに仕入債務の増加により前連結会計年度末に比べ7億52百万円増加し、当連結会計年度末は23億99百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果得られた資金は76億32百万円（前連結会計年度は5億5百万円の使用）となりました。

これは主に、売上債権およびたな卸資産の減少ならびに仕入債務の増加によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は85百万円（前連結会計年度は71百万円の獲得）となりました。

これは主に、有形固定資産の取得によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は67億94百万円（前連結会計年度は9億61百万円の獲得）となりました。

これは主に、短期借入金金の減少によるものであります。

(3) 利益配分に関する基本方針および当期の配当

当社は、内部留保の充実による企業体質の強化をはかりつつ、安定かつ高い水準の利益還元を継続的に行うことを基本方針としております。

当期につきましては、1株当たり12円の間配当を実施し、期末配当につきましては法人税等の大幅な減少により当期純利益が増加いたしました。税金等調整前当期純利益ならびに経営環境を総合的に判断し、1株当たり18円とさせていただきます。

この結果、通期におきましては1株当たり30円の配当となり、当期の連結配当性向は19.1%となりました。

また、内部留保金につきましては、市況・需要動向に迅速に対応できる在庫体制の拡充や新しい拠点施設の整備などに有効に利用し、結果として株主の方々へのさらなる利益還元を積極的に行ってまいります。

2【販売及び仕入の状況】

(1) 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)	前年同期比 (%)
九州・中国 (百万円)	88,186	98.9
関西・中京 (百万円)	42,434	97.8
関東・東北 (百万円)	31,956	101.3
報告セグメント計 (百万円)	162,577	99.1
連結財務諸表との調整額 (百万円)	△12,579	—
合計 (百万円)	149,998	101.4

(注) 1. 総販売実績に対し10%以上の販売を行っている相手先はありません。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 仕入実績

当連結会計年度の仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)	前年同期比 (%)
九州・中国 (百万円)	81,221	97.3
関西・中京 (百万円)	38,659	92.2
関東・東北 (百万円)	28,682	98.0
報告セグメント計 (百万円)	148,563	96.1
連結財務諸表との調整額 (百万円)	△12,451	—
合計 (百万円)	136,112	98.2

(注) 1. 仕入実績は、商品仕入および材料仕入です。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

3 【対処すべき課題】

鉄鉱石・石炭・鉄スクラップ等の鉄鋼原材料価格の変動による鉄鋼商品市況の影響により、当社が属している鉄鋼流通業は市況の上昇による販売与信リスク、在庫金利負担の増加リスクの発生、もしくは市況の下落による在庫の販売損ならびに評価損の発生リスクが企業経営に大きな影響を及ぼし、販売力・財務力などの差異により企業間格差は拡大傾向にあります。

このような環境のなか、当社グループは企業間競争に勝ち残るため、下記の課題克服にチャレンジし続けてまいります。

- (1) 「販売エリアの拡大」策として、出張販売から徐々に販売エリアを広げ、営業所の開設へとつなげることでより得意先への細やかな対応を目指してまいります。
- (2) 「販売シェア向上」策として、最終ユーザーをターゲットとした川下戦略により、販売先の件数増加をはかり、販売力の強化および与信リスク分散に努めてまいります。
- (3) 「大型ストックヤードの保有による多品種構成のスーパーマーケット型事業展開」を実現するため、各仕入先との関係強化、設備投資や在庫保有に必要な資金調達が柔軟に行えるよう財務体質の強化に尽力してまいります。さらに、付加価値の高い商品の販売や自社岸壁の保有など物流コストの削減を目指すことにより収益率を高めてまいります。
- (4) 商品販売のみならず工事請負事業にも注力し、付加価値の向上と市況に影響を受けにくい体制づくりを目指してまいります。
- (5) 与信管理の強化策として回収条件の変更、与信調査の強化をはかってまいります。
- (6) 今後の事業展開を鑑み、人材の育成が急務であり、個々のレベルアップとともに組織力強化をはかるため、情報と業務の共有化の徹底に取り組んでまいります。さらに、人材確保におきましても少子高齢化社会が進むなか、人材の確保が難しくなっており、インターネット等を駆使し、幅広く会社の認知度を高め、世代のバランスを考えた新卒・中途の採用を積極的に行ってまいります。

4 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 当社グループを取り巻く環境について

- ① 当社グループは、アジアを中心として鋼材の輸出入業務を行っております。国内はもちろん、世界的またはその国・その地域の景気後退、競争激化により、あるいは特定の国・地域における予測不可能な政策変更、規制強化、政情不安等により損失が発生した場合、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

さらに、外貨建取引を行うにおいては為替変動リスクを軽減するため、原則として為替予約等の措置を講じておりますが、当該リスクを完全に回避できる保証はありません。今後の為替変動によっては、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

- ② 当社グループは、鉄鋼商品の在庫販売を行っております。鉄鋼市況の変動への適宜な対応が出来なかった場合、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。
- ③ 当社グループは、主として金融機関からの借入金により事業資金を調達しております。今後の金利変動によっては、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。
- ④ 当社グループは、事業戦略の一環として、金融機関や販売または仕入に係る取引先の株式を保有しておりますが、今後の株価動向によっては、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。
- ⑤ 当社グループは、取引先に対し営業債権を保有しております。約3,000社にのぼる全販売先に対して与信枠を設定するとともに、定期的に見直しをはかり、貸倒リスクの低減に努めておりますが、全額回収を保証するものではありません。特定の取引先において、倒産等により債務不履行が生じた場合、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。
- ⑥ 当社グループは、コーポレート・ガバナンス、コンプライアンスおよびリスク管理を経営上の重要な課題と位置づけており、内部統制システム整備の基本方針を定め、同システムの継続的な充実・強化をはかっております。業務運営においては役員・社員の不正および不法行為の防止に万全を期しておりますが、万一かかる不正行為が発生した場合、経営成績および財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 法的規制について

当社は、建設機材類の販売において、建設業者より建設工事の一部工事を請負う受注があり、そのために、「建設業法」に基づき国土交通大臣により特定建設業許可を受けております。

許可番号 国土交通大臣許可（特-24）第8648号

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

該当事項はありません。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたり、重要な影響を与える見積りを必要とする会計方針としては、以下のようなものがあると考えております。

① 貸倒引当金

当社グループは、業界の慣習から債権回収が手形もしくは延払現金が多いことから、債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権および破産更生債権等については、財務内容評価法によっております。将来、取引先の財務状況等が悪化し、支払能力が低下した場合には、引当金の追加計上または貸倒損失が発生する可能性があります。

② 投資有価証券の減損処理

当社グループは、保有する有価証券について、時価のあるものについては、期末における時価が取得原価に比べ30%以上下落した場合には「著しく下落した」と判断して、その減損処理の対象としております。ただし、30%~50%の下落した銘柄については、その時価の回復可能性等を検討して、減損処理の要否を判定することとしております。時価のない有価証券については実質価格が著しく低下した場合に減損処理を行っております。将来、株式市況または投資先の業績が悪化した場合には、さらなる評価損の計上が必要となる可能性があります。

③ 繰延税金資産

当社グループは、繰延税金資産の回収可能性を評価するに際して、将来の課税所得を合理的に見積もっております。繰延税金資産の回収可能性は将来の課税所得の見積りに依存しますので、その見積額が減少した場合には、繰延税金資産が減額され税金費用の追加計上が発生する可能性があります。

(2) 当連結会計年度の経営成績の分析

当社グループの当連結会計年度の経営成績は、売上高1,499億98百万円（前年同期比1.4%増）、営業利益31億57百万円（前年同期比26.4%増）、経常利益33億59百万円（前年同期比26.9%増）、当期純利益32億54百万円（前年同期比115.5%増）となりました。

① 売上高

鋼材販売単価は下がったものの、鋼材販売数量ならびに完成工事高が増加したことにより売上高は増加いたしました。

② 営業利益

販売数量の増加ならびに完成工事高の増加により営業利益は増加いたしました。

③ 経常利益

営業外収益は主に受取配当金が増加したことにより増加いたしました。また、営業外費用は主に借入金等にかかる支払利息が減少したことにより減少いたしました。

④ 当期純利益

特別利益は主に投資有価証券売却益を28百万円計上したことにより30百万円となりました。また、特別損失は主に投資有価証券評価損が第2四半期末に30百万円発生したこと、ならびに横浜鋼業株式会社を吸収合併したことに伴う厚生年金基金脱退損失56百万円の発生により95百万円となりました。

また、横浜鋼業株式会社の吸収合併に伴い、法人税法に基づく横浜鋼業株式会社の繰越欠損金を引き継いだことにより法人税等が大幅に減少したため当期純利益は32億54百万円（前年同期比115.5%増）となりました。

(3) 経営成績に重要な影響を与える要因について

当社グループの主要販売先は建設関連業者や機械製造業者等であり、公共投資や民間設備・住宅投資額の変動により需要動向が大きく影響を受ける傾向にあります。

このため、当社グループの売上高は、需要動向に対応する販売数量および鉄鋼商品市況に高く依存しております。利益面におきましても、同業他社との販売競争は依然厳しい環境のなかで、収益向上は仕入価格の低減と在庫商品の市況動向に即応した数量調整をはかることが不可避であります。

また、当社グループが主に販売している建設関連業者は、資材価格や人件費が増加傾向にあり受注価格への転嫁が遅れていることから厳しい経営状況が続くものと予想され、今後も不良債権の発生リスクが高まっております。

このため、全取引先に対する与信限度額の見直しをはかるなど与信管理の徹底をはかり貸倒リスク低減に努めてまいります。さらに、凶らずも発生した不良債権に対しては、当社グループが必要と考える引当金を積んでおります。

(4) 経営戦略の現状と見通し

当社グループといたしましては、これらの現状を踏まえて、主力である鉄鋼・建材商品販売事業については、「販売エリアの拡大」と「販売シェアの向上」を基本戦略とし、支店ならびに当社グループ間との同行営業・協同仕入を密にすることにより営業力に更なるシナジーを発揮してまいります。

工事請負事業につきましては、鉄鋼・建材商品の販売に伴う工事請負事業が今後も販売先からのニーズとして高まってくることから特に鉄骨工事など当社グループの専門性を活かした営業を今後も九州エリアを中心に強化してまいります。

不動産賃貸等事業については、新たな不動産取得による賃貸事業の推進ではなく、従来から行っている遊休不動産の有効活用を中心とした事業展開をはかってまいります。

(5) 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、短期借入金の減少および有形固定資産の取得による支出が増加したものの、売上債権およびたな卸資産の減少ならびに仕入債務の増加により前連結会計年度末に比べ7億52百万円増加し、当連結会計年度末は23億99百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は76億32百万円（前連結会計年度は5億5百万円の使用）となりました。

これは主に、売上債権およびたな卸資産の減少ならびに仕入債務の増加によるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は85百万円（前連結会計年度は71百万円の獲得）となりました。

これは主に、有形固定資産の取得によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は67億94百万円（前連結会計年度は9億61百万円の獲得）となりました。

これは主に、短期借入金の減少によるものであります。

当社グループは、引き続き財務の健全性を保ち、営業活動によりキャッシュ・フローを生み出すことを基本とし、当社グループの成長のために将来必要な運転資金および設備投資資金を柔軟性をもって調達して行きたいと考えております。

(6) 経営者の問題意識と今後の方針について

当社グループの経営環境は、中国経済の急速な台頭を背景として、国内のみならず東アジア全体が一体として変動していくグローバルな環境となっており、収益をいかに確保していくかは、価格の変動リスクに柔軟に対応し、販売数量を確保することができるかが大きな課題です。このような環境のなかで、販売力・財務体質が弱い企業は、衰退の一途であり、今後加速度的に淘汰が進み企業間格差がさらに拡大していくものと考えられます。

今後は、めまぐるしく変化する経営環境のなかで社内体制の一層の充実をはかり、従来から進めている「販売エリアの拡大」と「販売シェアの向上」を基本戦略とした、「存在感のある企業づくり」をさらに進めることにより、鉄鋼流通業界のなかで大きく飛躍できる絶好の機会を活かしてまいりたいと考えております。

また、その結果として、業績の向上とともに社会貢献と株主還元積極的に取り組んでまいります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループでは、経営環境がめまぐるしく変化するなか、「販売エリアの拡大」と「販売シェアの向上」を基本戦略とした「存在感のある企業」づくりを充実させるため、1億40百万円の設備投資を行いました。

その主なものは、九州・中国セグメントの宮崎営業所の太陽光発電設備57百万円であります。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

当社は、国内19ヶ所に販売拠点があり、このうち7ヶ所はストックヤードを併設したものであります。

なお、大阪・東京・八戸・沖縄・鹿児島・宮崎・山口・名古屋・北陸・京滋・兵庫・四国の12ヶ所は賃借の事務所であり、東京支店におきましては、千葉県浦安市にストックヤードを、神奈川県川崎市にストックヤードとコイルセンターを所有しております。また、大阪支店におきましては、大阪府堺市にストックヤードを所有しております。

また、国内に賃貸施設や厚生施設を有しているほか、ゴルフ練習場の運営をしております。

以上の設備は、以下のとおりであります。

平成25年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備 の内容	帳簿価額						従業員数 (人)
			建物及び構 築物 (百万円)	機械装置及 び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
大分本店(大分県大分市)	九州・中国	販売設備	103	1	103 (9,341.84)	—	2	211	34 (3)
小倉支店(北九州市小倉北区)	九州・中国	販売設備	185	17	227 (20,749.75)	3	4	437	79 (6)
熊本支店(熊本市南区)	九州・中国	販売設備	58	0	469 (6,703.71)	—	1	528	24 (3)
広島支店(広島県安芸郡坂町)	九州・中国	販売設備	107	0	373 (8,264.00)	—	0	481	29 (1)
福岡支店(福岡市東区)	九州・中国	販売設備	1,002	71	3,109 (36,535.00)	2	2	4,187	70 (2)
長崎支店(長崎県西彼杵郡時津町)	九州・中国	販売設備	95	0	399 (9,428.37)	—	3	498	29 (1)
沖縄支店(沖縄県那覇市)ほか3ヶ所	九州・中国	賃借設備	1	—	— (—)	—	1	3	34 (1)
大阪支店(大阪市西区)ほか5ヶ所	関西・中京	販売設備	62	—	117 (281.12)	5	1	186	49
大阪支店堺ステールセンター(堺市西区)	関西・中京	販売設備	562	6	1,539 (26,851.80)	—	0	2,108	1
名古屋営業所(名古屋市中村区)ほか4ヶ所	関西・中京	賃借設備	4	—	— (—)	—	3	7	29 (1)
東京支店(東京都中央区)ほか1ヶ所	関東・東北	賃借設備	9	—	— (—)	3	4	17	33
東京支店浦安センター(千葉県浦安市)	関東・東北	販売設備	716	30	3,108 (27,020.00)	—	7	3,862	11 (8)
東京支店川崎センター(川崎市川崎区)	関東・東北	販売設備	2,614	282	3,501 (29,385.20)	—	3	6,403	—

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備 の内容	帳簿価額						従業員数 (人)
			建物及び構 築物 (百万円)	機械装置及 び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
仙台支店(仙台市宮 城野区)	関東・東北	販売設備	51	—	23 (387.68)	—	1	76	8
マリゼ春日浦ゴル フスクエア(大分県 大分市)	九州・中国	ゴルフ練 習場	108	0	241 (31,423.10)	—	0	350	5
大分本店(大分県大 分市)ほか7市町	九州・中国	賃貸	2,066	84	3,779 (115,012.93)	—	2	5,932	—
仙台支店(仙台市宮 城野区)	関東・東北	賃貸	456	19	840 (13,972.32)	—	0	1,316	—
厚生施設 (北九州市小倉北区 ほか)	九州・中国	—	286	—	355 (5,493.11)	—	0	641	—

- (注) 1. 賃貸施設には、子会社、西日本スチールセンター株式会社への賃貸設備として、建物(404百万円)および土地(554百万円・11,643.45㎡)を、また、小野建沖繩株式会社への建物(261百万円)および土地(257百万円・6,611.58㎡)を含めております。
2. 帳簿価額のうち「その他」は、器具備品であり、建設仮勘定は含んでおりません。なお、金額には消費税等を含めておりません。
3. 従業員数の()内は、外書で嘱託を表示しております。

(2) 国内子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額						従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬 具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
西日本スチ ールセン ター株 式会社	本社工場 (北九州市小 倉北区)	九州・中国	コイルの 切断設備	310	691	153 (5,063.10)	—	28	1,184	14 (1)
三協則武鋼業 株式会社	本社工場 (大阪府松原 市)	関西・中京	コイルの 切断設備	112	212	498 (7,480.50)	—	5	828	49 (4)

- (注) 1. 子会社、西日本スチールセンター株式会社の設備は、上記の帳簿価額のほかに提出会社から賃借している建物(404百万円)および土地(554百万円・11,643.45㎡)があります。
2. 帳簿価額のうち「その他」は、器具備品であります。
3. 従業員数の()内は、外書で嘱託を表示しております。

(3) 在外子会社

該当事項はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループ（当社および連結子会社）の当連結会計年度末現在における重要な設備の新設計画は次のとおりであります。

- (1) 重要な設備の新設等
該当事項はありません。

- (2) 重要な設備の除却等
該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	50,000,000
計	50,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末 現在発行数(株) (平成25年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成25年6月24日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	21,244,830	同左	(株)東京証券取引所 (市場第一部) 証券会員制法人福岡証 券取引所	単元株式数 100株
計	21,244,830	同左	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高(百万円)
平成20年10月1日 (注)	462,105	21,244,830	421	3,780	421	3,494

(注) 横浜鋼業株式会社との株式交換に伴う新株の発行による増加であります。

発行価格 843百万円

資本組入額 421百万円

(6) 【所有者別状況】

平成25年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数 100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	38	31	145	101	1	2,741	3,057	—
所有株式数（単元）	—	56,901	2,046	25,613	20,755	4	107,066	212,385	6,330
所有株式数の割合（%）	—	26.80	0.96	12.06	9.77	0.00	50.41	100.00	—

（注）1. 自己株式518,954株は「個人その他」に5,189単元および「単元未満株式の状況」に54株を含めて記載しております。

2. 株主数は、単元未満株式のみを所有する株主の人数を含めています。

(7) 【大株主の状況】

平成25年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式総数に対する所有株式数の割合（%）
オーエストラスト㈱	北九州市小倉北区西港町12-1	1,509	7.10
日本トラスティ・サービス信託銀行㈱（信託口）	東京都中央区晴海1-8-11	1,182	5.56
小野 建	北九州市小倉北区	616	2.89
小野 哲司	北九州市八幡東区	616	2.89
小野 信介	北九州市小倉北区	616	2.89
小野 明	福岡市南区	615	2.89
小野 哲也	東京都渋谷区	597	2.81
日本マスタートラスト信託銀行㈱（信託口）	東京都港区浜松町2-11-3	592	2.79
小野 典子	北九州市小倉北区	531	2.49
小野 多美子	北九州市八幡東区	531	2.49
計	—	7,407	34.86

（注）株式会社みずほ銀行およびその共同保有者であるみずほ信託銀行株式会社から平成24年4月6日付の大量保有報告書の写しの送付があり、平成24年3月30日現在でそれぞれ以下のとおり株式を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として期末時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数（株）	株券等保有割合（%）
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区内幸町1-1-5	株式 24,350	0.11
みずほ信託銀行株式会社	東京都中央区八重洲1-2-1	株式 829,000	3.90

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成25年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 518,900	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 20,719,600	207,196	—
単元未満株式	普通株式 6,330	—	—
発行済株式総数	21,244,830	—	—
総株主の議決権	—	207,196	—

(注) 「単元未満株式」には、当社所有の自己株式54株が含まれております。

② 【自己株式等】

平成25年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数 (株)	他人名義所有 株式数 (株)	所有株式数の 合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合 (%)
小野建株式会社	大分県大分市大字鶴 崎1995番地の1	518,900	—	518,900	2.44
計	—	518,900	—	518,900	2.44

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	1	681
当期間における取得自己株式	20	19,760

(注) 当期間における取得自己株式には、平成25年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	518,954	—	518,974	—

(注) 1. 当期間における処理自己株式数には、平成25年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、平成25年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、経営環境がめまぐるしく変化するなかで、財務体質の強化による信用力の向上をはかってまいりましたが、今後につきましても内部留保の充実による企業体質の強化をはかりつつ、安定かつ高い水準の利益還元を継続的にを行うことを基本方針としております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める。」旨定款に定めております。

当期につきましては、1株当たり12円の間配当を実施し、期末配当につきましても税引前当期純利益ならびに経営環境を総合的に判断し、1株当たり18円とさせていただきます。

この結果、通期におきましては、1株当たり30円の配当となり、当期の連結配当性向は19.1%となりました。

また内部保留金につきましては、市況・需要動向に迅速に対応できる在庫体制の拡充や新しい拠点設備の整備などに有効に利用し、結果として株主の方々へのさらなる利益還元を積極的に行ってまいります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成24年11月5日 取締役会決議	248	12
平成25年5月15日 取締役会決議	373	18

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第60期	第61期	第62期	第63期	第64期
決算年月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月	平成24年3月	平成25年3月
最高(円)	1,950	1,010	894	778	933
最低(円)	631	576	592	596	599

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成24年10月	11月	12月	平成25年1月	2月	3月
最高(円)	649	650	776	860	919	933
最低(円)	603	599	625	788	820	815

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役社長	—	小野 建	昭和27年1月1日生	昭和50年4月 当社入社 昭和53年10月 当社取締役小倉支店次長 昭和58年8月 当社取締役大阪営業所長 平成2年4月 当社取締役小倉支店長兼大阪営業所長 平成7年6月 当社代表取締役社長に就任(現任) 平成14年8月 西日本スチールセンター株式会社代表取締役社長に就任(現任) 平成22年9月 小野建沖繩株式会社代表取締役会長に就任(現任)	(注)4	616
代表取締役副社長	大阪支店長	小野 剛	昭和55年3月17日生	平成17年10月 当社入社 平成21年4月 当社大阪支店鉄鋼部部长 平成22年6月 当社取締役大阪支店副支店長 平成23年6月 当社取締役大阪支店長に就任 平成25年6月 当社代表取締役副社長兼大阪支店長に就任(現任)	(注)4	39
代表取締役専務	—	小野 哲司	昭和32年11月16日生	昭和55年4月 当社入社 平成元年9月 当社取締役大分本店長 平成2年10月 当社取締役社長室長 平成3年4月 当社取締役管理統括本部長兼経理部長 平成7年6月 当社常務取締役管理統括本部長 平成15年6月 当社代表取締役専務管理統括本部長に就任 平成18年4月 代表取締役専務(現任)	(注)4	616
取締役	福岡支店長	松尾 俊朗	昭和25年2月22日生	昭和43年4月 当社入社 平成11年6月 当社長崎支店長 平成15年6月 当社取締役長崎支店長 平成21年4月 当社取締役営業統括本部長 平成22年6月 当社取締役福岡支店長に就任(現任)	(注)4	6
取締役	開発室長	小野 明	昭和43年8月24日生	平成8年4月 当社入社 平成15年1月 当社開発室長 平成15年6月 当社取締役開発室長に就任(現任)	(注)4	615
取締役	管理統括本部長	小野 信介	昭和45年5月24日生	平成9年4月 当社入社 平成15年1月 当社福岡支店管理部長 平成15年6月 当社取締役福岡支店管理部長 平成18年4月 当社取締役管理統括本部長に就任(現任)	(注)4	616
取締役	小倉支店長	大久保 隆康	昭和27年10月16日生	昭和50年3月 当社入社 平成14年1月 当社小倉支店建機部長 平成18年4月 当社小倉支店副支店長 平成19年6月 当社取締役小倉支店長に就任(現任)	(注)4	6

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	東京支店長	高傘礼 厚	昭和34年8月26日生	昭和58年3月 当社入社 平成9年7月 当社東京営業所所長 平成12年4月 当社東京支店長 平成19年6月 当社取締役東京支店長に就任 (現任)	(注) 4	0
取締役	鉄鋼本部長 (中国・九州 エリア担当)	安部 要敬	昭和25年12月7日生	昭和49年4月 当社入社 平成16年1月 当社小倉支店鉄鋼部部长 平成21年6月 当社取締役小倉支店鉄鋼部部长 平成22年6月 当社取締役鉄鋼本部長(中 国・九州エリア担当)に就任 (現任)	(注) 4	2
常勤監査役	—	西 政勝	昭和27年5月1日生	昭和47年3月 当社入社 平成13年1月 当社小倉支店経理部長 平成24年6月 当社常勤監査役に就任(現 任)	(注) 5	8
監査役	—	古庄 玄知	昭和32年12月23日生	昭和60年4月 古庄玄知法律事務所開設 平成16年6月 弁護士法人 古庄総合法律事 務所設立 同法人代表社員弁護士(現 任) 平成16年6月 当社監査役に就任(現任)	(注) 5	—
監査役	—	山上 知裕	昭和26年6月21日生	平成5年4月 ひびき法律事務所開設 平成24年6月 当社監査役に就任(現任)	(注) 5	—
計						2,526

- (注) 1. 監査役古庄玄知および山上知裕は、社外監査役であります。
2. 代表取締役副社長小野剛は、代表取締役社長小野建の実子であります。
3. 代表取締役専務小野哲司は、代表取締役社長小野建の実弟であります。
4. 平成25年6月21日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
5. 平成24年6月22日開催の定時株主総会の終結の時から4年間

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社グループは、急激な経営環境の変化に迅速かつ的確に対応し、常に新しい価値の創造に努め業績の向上を目指しております。このため、社内管理体制の充実を図るとともに、法令遵守と株主尊重の意識を徹底し、適切に情報の開示を行うことにより経営の透明性をはかつていくことを今後さらに推進していきます。

① 企業統治の体制

(企業統治の体制の概要及びその体制を採用する理由)

当社は、社外取締役の採用や執行役員制度の導入には至っていないものの、取締役会を適宜開催しております。内部監査室は各営業拠点ならびにグループ会社を監査しております。セグメント別ブロック会議は情報交換の手段として適宜開催しております。

上記の体制を採用する理由は、取締役会の頻度を上げることにより業務執行機能の効率性と公正性を高め、迅速かつ的確な意思決定をはかる目的です。内部監査室は監査役ならびに会計監査人と連携することによりコーポレートガバナンスの強化につながるものと考えております。セグメント別ブロック会議は取締役会で決定した営業方針を元に、地域性を活かした最善の店舗運営につなげております。

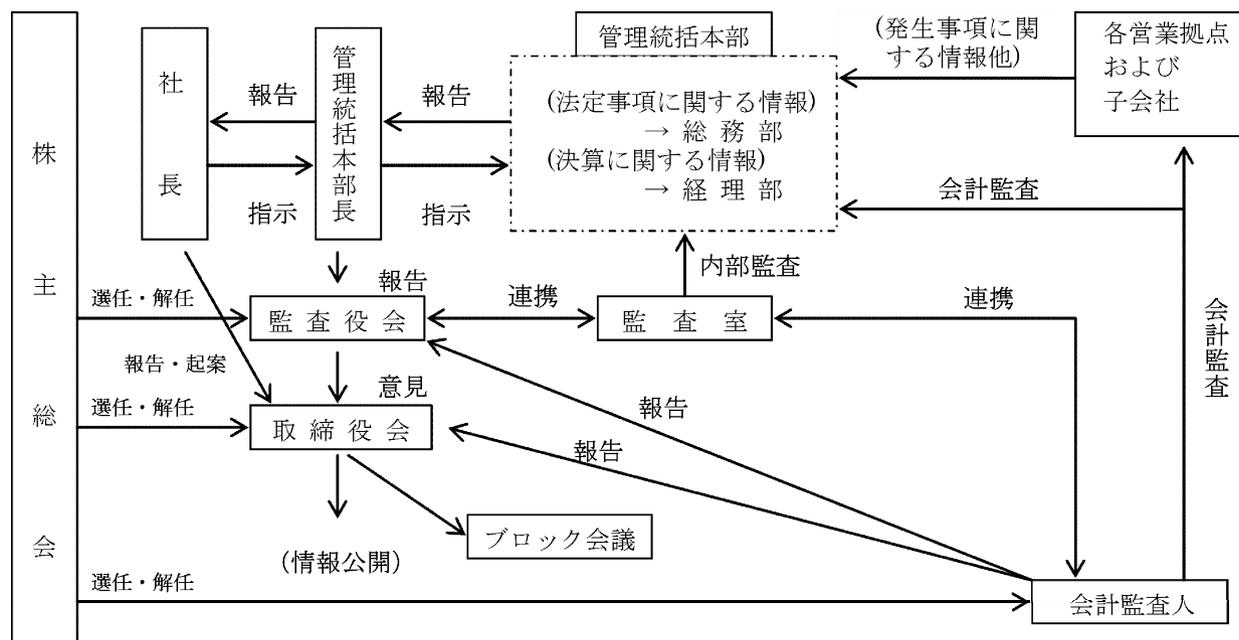
(情報の管理)

決算に関する情報および重要な会社情報が生じた場合には、全て管理統括本部へその情報を集約し、管理統括本部長を経由して社長へ報告した後、取締役会の承認を経て公表しております。

公表と同時に各本支店長ならびに子会社社長を経由して全役職員にその重要な会社情報の周知徹底をはかつております。

監査役会は会社情報に関して取締役会にて意見を述べ経営監視機能の強化をはかり、監査室は発生事項に関しての助言・勧告を行い社内業務の適正化をはかつております。

(企業統治の体制)



(情報開示)

情報開示につきましては、フェアディスクロージャーの基本原則に基づき、経営の透明性の向上と公正性をはかるため決算時期の早期化に取り組むとともにその内容の周知徹底をはかるため積極的にIR活動を行っております。

特に、経営状況につきましては、決算毎に機関投資家向けを中心とした会社説明会を実施し、かつ、当社ホームページ上においてIR情報としての四半期決算を含め決算状況を開示しており、さらに決算公告も2002年3月期決算分からホームページ上に掲載しております。

今後も、迅速かつ継続的な情報開示と株主、投資家の皆様とのコミュニケーションに努めて行くための大きな手段としてホームページの活用が不可欠であるとの認識から、随時リニューアルしております。

さらに、全社の一元管理をはかるため基幹業務のコンピュータシステムの最適化につとめ、更なる業務の効率化をはかるとともに個人情報を含めた情報管理の徹底と迅速な情報開示に努めてまいります。

(内部統制システムおよびリスク管理体制の整備の状況)

当社は、取締役会において、会社法および会社法施行規則に基づき、次のとおり、内部統制基本方針（業務の適正を確保するための体制に関する基本方針）を定めるとともに、適宜、その見直しを行う。

イ 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

取締役の職務執行に係る情報については、取締役会規程・文書取扱規程に従い議事録を作成保存するとともに適切に管理を行う。

監査役は取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理について、関連諸規程に準拠して実施されているかについて監査し、必要に応じて取締役会に報告する。

ロ 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

与信管理規程・資金運用管理規程等の各種リスクに関する関連諸規程を整備し適切な管理を行う。

取締役会は必要に応じて適時リスクに関する体制を見直し、問題点の把握と改善に努める。

ハ 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

適宜取締役会を開催し、意思決定の迅速な伝達を行っていく。

ニ 取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

使用人は職務分掌規程および職務権限規定にしたがった職務を執行するにあたり、就業規程等の関連諸規程により法令遵守の理解および研修による理解の強化を計っていく。

監査役および内部監査室は連携し、コンプライアンス体制の調査、法令ならびに定款上の問題の有無を調査し、取締役会は、定期的にコンプライアンス体制を見直し、問題点の把握と改善に努める。

ホ 株式会社ならびにその連結計算書類作成会社および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

関係会社管理規程に従い、管理統括本部長が関係会社に対する業務全般を統括し、必要な施策は関係部長に合議のうえ、取締役の決済を受けるものとする。

管理統括本部長は、内部監査室と連携して関係会社に対し、原則として毎年2回定期または臨時に実地監査を行う。

ヘ 監査役がその職務の補助をすべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制

監査役監査規程に従い、監査役は必要に応じて取締役の同意を得て、会社従業員の中より適当な助言者を求めることができることとする。

ト 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項

前号の使用人の取締役からの独立性を確保するため、該当使用人の人事異動・評価等を行う場合は予め監査役に相談し、意見を求めることとする。

チ 取締役および使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

取締役および使用人は監査役に対し以下の報告を遅滞なく行う。

1) 会社に著しい損害を及ぼす恐れのある事実を発見した場合は、直ちにその事実

2) 役職員が法令もしくは定款に違反する行為をし、またはこれらの行為をする恐れがあると考えられるときは、その旨

3) 監査役が報告を求めた事項、その他監査上有用と判断される事項

リ その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役は重要な意思決定のプロセスや業務の執行状況を把握する為、取締役会等の重要な会議に出席し必要に応じて報告または意見を述べるができることとする。

(責任限定契約の内容の概要)

当社と社外監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は法令が規定する金額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失がないときに限られます。

② 役員報酬等

取締役および監査役に支払った報酬の内容は次のとおりです。

[小野建株式会社取締役・監査役報酬]

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役	199	124	—	50	25	9
監査役	7	6	—	—	0	2
社外役員	2	2	—	—	0	3

(注) 1. 当社には、社外取締役はおりません。

2. 上記金額には、使用人兼務役員に支給した使用人分給与（賞与を含む）は含んでおりません。

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社の役員の報酬等の額において、取締役の報酬限度額は、昭和63年9月30日開催の第39期定時株主総会において年額3億円以内、監査役の報酬限度額は、昭和63年9月30日開催の第39期定時株主総会において年額300万円以内と決議いただいております。各取締役の報酬額は取締役会にて、各監査役の報酬額は監査役会にて決定しております。

③ 内部監査及び監査役監査の状況

当社の内部監査ならびに内部統制業務は監査室が担当し、監査室長以下十分な業務知識を持つ2名の体制で行っております。監査室は、各拠点毎に年2回程度を目処に実地監査を実施しており、業務の平準化と効率化ならびに管理体制のチェックを主に行っております。

また、監査役または会計監査人と相互に適時適切な会合を持ちながら、意見交換・情報の伝達を行い、適正かつ効率的な監査を行うべく連携を密にしております。

監査役3名は、取締役会への出席および監査役会の開催ならびに重要な書類の閲覧等を行うことにより、より公正な監査が実施できる体制となっております。なお、常勤監査役西政勝は、経理部門で経験を積んでおり、財務および会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

また、社外監査役として積極的に弁護士2名を登用し、独立性を確保するとともに近年の複雑化する経営環境のなかで法律家の見地からのアドバイスも受けることにより、経営に対する監視・監査機能を果たしております。

また、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、予め補欠監査役2名を選任しております。

④ 会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士の氏名、所属する監査法人名および継続監査年数は、次のとおりであります。

公認会計士の氏名等		所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員	森 行一 宮本 義三	新日本有限責任監査法人

(注) 継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略しております。

また、当社の会計監査業務にかかる補助者は、公認会計士10名、その他9名であり、適正な情報の提供と企業会計の基準に準拠しての監査を行い、さらに必要な都度監査役ならびに監査室から情報収集を行うことにより、当社グループの経営状況の把握を行っております。なお、会計監査人と当社との間には、利害関係はありません。

⑤ 社外取締役及び社外監査役

当社の社外監査役は2名であります。

社外監査役である古庄玄知および山上知裕は両名とも弁護士であります。当社との顧問契約はありません。

また、依頼案件がある場合には、当社と関連を有しない他の当事者と同様の条件により決定しております。その他、社外監査役との重要な人的関係および資本的關係はありません。

当社は、社外監査役を選任するための独立性に関する基準の制定は行っておりませんが、一般株主と利益の相反が生じるおそれのない社外監査役であることから、同2名を独立役員に指定しております。

なお、当社は社外取締役を選任していません。当社は、経営の意思決定と業務執行機能を持つ取締役会に対し、監査役3名中2名を社外監査役とすることで経営への監視機能を強化しております。コーポレート・ガバナンスにおいて、外部からの客観的、中立の経営監視の機能が重要と考えており、社外監査役2名による監査が実施されることにより、外部からの経営監視機能が十分に機能する体制が整っているため、現状の体制としております。

また、内部監査・監査役監査および会計監査との相互連携については、監査役会において監査状況の報告を受け、問題点の指摘や意見表明を行っております。

⑥ 取締役の定数

当社の取締役は12名以内とする旨定款に定めております。

⑦ 剰余金の配当等の決定機関

当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

⑧ 自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することを目的とするものであります。

⑨ 取締役の選任決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらない旨定款に定めております。

⑩ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑪ 取締役および監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）および監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役および監査役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

⑫ 株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

34銘柄 809百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
大阪製鐵(株)	129,800	213	取引関係強化
(株)肥後銀行	242,000	118	同上
(株)西日本シティ銀行	368,271	86	同上
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	138,672	50	同上
(株)エムオーテック	211,000	45	同上
(株)奥村組	107,000	34	同上
三協・立山ホールディングス(株)	186,000	26	同上
(株)大分銀行	80,268	21	同上
(株)南陽	36,730	16	同上
阪和興業(株)	40,000	15	同上
日鐵商事(株)	41,000	11	同上
(株)上組	12,355	8	同上
(株)三井住友フィナンシャルグループ	3,000	8	同上
太平洋セメント(株)	48,000	8	同上
ジャパンパイル(株)	14,500	5	同上
(株)ゼンリン	4,958	4	同上
太平工業(株)	2,000	0	同上
(株)アイ・テック	1,200	0	同上
(株)高田工業所	1,597	0	同上

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
大阪製鐵(株)	129,800	209	取引関係強化
(株)肥後銀行	242,000	145	同上
(株)西日本シティ銀行	368,271	108	同上
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	138,672	66	同上
(株)奥村組	107,000	39	同上
三協立山(株)	18,600	35	同上
(株)大分銀行	80,268	28	同上
(株)南陽	36,730	21	同上
阪和興業(株)	40,000	13	同上
日鐵商事(株)	41,000	11	同上
(株)三井住友フィナンシャルグループ	3,000	11	同上
(株)上組	12,799	11	同上
太平洋セメント(株)	48,000	10	同上
ジャパンパイル(株)	14,500	8	同上
(株)ゼンリン	4,958	6	同上
(株)アイ・テック	1,200	1	同上
太平工業(株)	2,000	0	同上
(株)高田工業所	1,597	0	同上

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	39	—	38	—
連結子会社	—	—	—	—
計	39	—	38	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬に関しては、業務内容・監査日数等を勘案し決定いたしております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成24年4月1日から平成25年3月31日まで）の連結財務諸表および事業年度（平成24年4月1日から平成25年3月31日まで）の財務諸表について、新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、適正な連結財務諸表を作成するためにマニュアルや作成プロセスの確立等の取組みをしております。

1 【連結財務諸表等】
 (1) 【連結財務諸表】
 ① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※2 1,769	※2 2,511
受取手形及び売掛金	※5 53,562	※5 52,132
商品及び製品	11,563	9,708
原材料及び貯蔵品	1,247	1,036
繰延税金資産	136	533
その他	3,845	3,037
貸倒引当金	△271	△232
流動資産合計	71,854	68,727
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※2 17,609	※2 17,615
減価償却累計額	△8,148	△8,699
建物及び構築物（純額）	9,461	8,915
機械装置及び運搬具	4,465	4,553
減価償却累計額	△2,775	△3,133
機械装置及び運搬具（純額）	1,689	1,419
土地	※2, ※3 18,916	※2, ※3 18,916
リース資産	19	23
減価償却累計額	△3	△8
リース資産（純額）	15	15
その他	405	416
減価償却累計額	△316	△342
その他（純額）	88	73
有形固定資産合計	30,171	29,340
無形固定資産		
のれん	202	54
その他	89	66
無形固定資産合計	291	121
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 767	※1 822
従業員に対する長期貸付金	31	30
繰延税金資産	47	10
その他	950	545
貸倒引当金	△555	△131
投資その他の資産合計	1,241	1,276
固定資産合計	31,705	30,739
資産合計	103,559	99,466

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※2 34,208	※2 35,040
短期借入金	17,500	11,200
1年内返済予定の長期借入金	※2 35	※2 24
リース債務	4	4
未払法人税等	527	125
賞与引当金	206	473
役員賞与引当金	56	60
繰延税金負債	0	—
その他	3,406	2,021
流動負債合計	55,945	48,950
固定負債		
長期借入金	※2 40	※2 16
リース債務	12	11
繰延税金負債	27	27
退職給付引当金	495	503
役員退職慰労引当金	397	384
資産除去債務	62	63
その他	303	308
固定負債合計	1,338	1,315
負債合計	57,283	50,265
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,780	3,780
資本剰余金	3,509	3,509
利益剰余金	39,358	42,157
自己株式	△602	△602
株主資本合計	46,045	48,844
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	147	252
繰延ヘッジ損益	7	10
その他の包括利益累計額合計	154	262
少数株主持分	75	93
純資産合計	46,275	49,200
負債純資産合計	103,559	99,466

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
売上高	147,942	149,998
売上原価	*1 137,583	*1 138,584
売上総利益	10,359	11,413
販売費及び一般管理費	*2 7,862	*2 8,255
営業利益	2,497	3,157
営業外収益		
受取利息	2	2
受取配当金	16	43
仕入割引	71	86
受取家賃	47	49
その他	107	98
営業外収益合計	245	281
営業外費用		
支払利息	44	33
売上割引	49	43
その他	1	2
営業外費用合計	95	79
経常利益	2,646	3,359
特別利益		
投資有価証券売却益	13	28
その他	1	2
特別利益合計	15	30
特別損失		
投資有価証券評価損	2	31
出資金評価損	6	—
厚生年金基金脱退損失	—	56
その他	6	7
特別損失合計	15	95
税金等調整前当期純利益	2,647	3,294
法人税、住民税及び事業税	1,107	390
法人税等調整額	21	△369
法人税等合計	1,129	21
少数株主損益調整前当期純利益	1,517	3,272
少数株主利益	7	17
当期純利益	1,510	3,254

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	1,517	3,272
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	21	105
繰延ヘッジ損益	△7	3
その他の包括利益合計	※ 14	※ 108
包括利益	1,532	3,381
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,524	3,363
少数株主に係る包括利益	7	17

③【連結株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	3,780	3,780
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	3,780	3,780
資本剰余金		
当期首残高	3,509	3,509
当期変動額		
自己株式の処分	△0	—
当期変動額合計	△0	—
当期末残高	3,509	3,509
利益剰余金		
当期首残高	38,407	39,358
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,510	3,254
当期変動額合計	951	2,798
当期末残高	39,358	42,157
自己株式		
当期首残高	△602	△602
当期変動額		
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
当期変動額合計	0	△0
当期末残高	△602	△602
株主資本合計		
当期首残高	45,094	46,045
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,510	3,254
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
当期変動額合計	951	2,798
当期末残高	46,045	48,844

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	125	147
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	21	105
当期変動額合計	21	105
当期末残高	147	252
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	14	7
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△7	3
当期変動額合計	△7	3
当期末残高	7	10
その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	139	154
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	14	108
当期変動額合計	14	108
当期末残高	154	262
少数株主持分		
当期首残高	68	75
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	7	17
当期変動額合計	7	17
当期末残高	75	93
純資産合計		
当期首残高	45,303	46,275
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,510	3,254
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	21	126
当期変動額合計	972	2,925
当期末残高	46,275	49,200

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	2,647	3,294
減価償却費	1,118	973
のれん償却額	110	147
無形固定資産償却費	46	36
長期前払費用償却額	1	1
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△11	267
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△12	3
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	19	8
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	24	△12
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△43	△413
受取利息及び受取配当金	△19	△46
支払利息	44	33
投資有価証券売却損益 (△は益)	△13	△22
投資有価証券評価損益 (△は益)	2	31
出資金運用損益 (△は益)	△0	—
出資金評価損	6	—
有形固定資産売却損益 (△は益)	△0	△2
有形固定資産除却損	3	2
売上債権の増減額 (△は増加)	△6,264	428
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△2,207	2,065
その他の流動資産の増減額 (△は増加)	257	△16
仕入債務の増減額 (△は減少)	4,844	1,894
未払消費税等の増減額 (△は減少)	191	42
その他の流動負債の増減額 (△は減少)	73	△44
その他の固定負債の増減額 (△は減少)	△6	6
小計	812	8,679
利息及び配当金の受取額	19	46
利息の支払額	△44	△33
法人税等の支払額	△1,293	△1,060
営業活動によるキャッシュ・フロー	△505	7,632

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の払戻による収入	45	10
有形固定資産の取得による支出	△47	△140
有形固定資産の売却による収入	2	3
投資有価証券の取得による支出	△1	△21
投資有価証券の売却による収入	35	67
無形固定資産の取得による支出	△6	△20
出資金の払込による支出	—	△0
出資金の売却による収入	0	—
従業員に対する長期貸付金の回収による収入	1	1
投資その他の資産の増減額 (△は増加)	41	14
投資活動によるキャッシュ・フロー	71	△85
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	1,700	△6,300
長期借入金の返済による支出	△77	△35
社債の償還による支出	△100	—
自己株式の売却による収入	0	—
自己株式の取得による支出	△0	△0
配当金の支払額	△558	△454
リース債務の返済による支出	△2	△5
財務活動によるキャッシュ・フロー	961	△6,794
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	527	752
現金及び現金同等物の期首残高	1,120	1,647
現金及び現金同等物の期末残高	* 1,647	* 2,399

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

西日本スチールセンター株式会社
三協則武鋼業株式会社
小野建沖縄株式会社

なお、横浜鋼業株式会社については、平成25年3月1日付で当社が吸収合併しております。

(2) 非連結子会社は、有限会社ブライトの1社であります。

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模会社であり、総資産、売上高、当期純損益および利益剰余金等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしておりませんので、連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社はありません。

(2) 持分法を適用しない非連結子会社の名称

有限会社ブライト

持分法を適用しない理由

持分法非適用会社は、当期純損益および利益剰余金等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

②たな卸資産

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、平成10年4月1日以降取得した建物（建物付属設備は除く）については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 10～47年

機械装置及び運搬具 4～14年

その他（工具、器具及び備品）

4～10年

②無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権および破産更生債権等については、財務内容評価法によっております。

②賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、賞与支給見込額に基づき当連結会計年度負担額を計上しております。

③役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

④退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

数理計算上の差異については、発生年度の翌連結会計年度に一括費用処理することとしております。

⑤役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、役員退職慰労金内規に基づく期末要支給額を計上しております。

(4) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

イ 当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事
工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

ロ その他の工事

工事完成基準を適用しております。

(5) 重要なヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

親会社は鉄鋼商品の輸入および輸出による外貨建予定取引の為替変動に対するヘッジとして、為替予約取引を行っております。

③ヘッジ方針

社内規程に基づき、為替変動リスクをヘッジする取引を行っております。

④ヘッジ有効性評価の方法

当社のリスク管理方針に従って、ヘッジ対象の相場変動とヘッジ手段の相場変動を比較し、その変動額の比率によって有効性を判断しております。

(6) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税および地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当連結会計年度の費用として処理しております。

(未適用の会計基準等)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日)および「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日)

(1) 概要

数理計算上の差異および過去勤務費用は、連結貸借対照表の純資産の部において税効果を調整した上で認識し、積立状況を示す額を負債または資産として計上する方法に改訂されました。また、退職給付見込額の期間帰属方法について、期間定額基準のほか給付算定式基準の適用が可能となったほか、割引率の算定方法が改訂されました。

(2) 適用予定日

平成26年3月期の年度末に係る連結財務諸表から適用いたします。ただし、退職給付見込額の期間帰属方法の改訂については、平成27年3月期の期首から適用いたします。なお、当該会計基準等には経過的な取り扱いが定められているため、過去の期間の財務諸表に対しては遡及適用いたしません。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

連結財務諸表作成時において財務諸表に与える影響は、評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表)

前連結会計年度において、「流動負債」の「その他」に含めていた「1年以内返済予定の長期借入金」は、明瞭性の観点から区分の必要性を見直したため独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動負債」の「その他」に表示していた34億41百万円は、「1年以内返済予定の長期借入金」35百万円、「その他」34億6百万円として組み替えております。

(連結損益計算書)

1. 前連結会計年度において、「営業外収益」の「その他」に含めていた「受取利息」は、明瞭性の観点から区分の必要性を見直したため、また、「受取配当金」は、「営業外収益」の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた1億26百万円は、「受取利息」2百万円、「受取配当金」16百万円、「その他」1億7百万円として組み替えております。

2. 前連結会計年度において、独立掲記していた「特別損失」の「固定資産除却損」は、特別損失の総額の100分の10以下となったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「特別損失」の「固定資産除却損」に表示していた5百万円は、「その他」として組み替えております。

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

(減価償却方法の変更)

当社および国内連結子会社は、法人税法の改正に伴い、当連結会計年度より、平成24年4月1日以後に取得した有形固定資産について、改正後の法人税法に基づく減価償却方法に変更しております。

これにより、従来の方法に比べて、当連結会計年度の営業利益、経常利益および税金等調整前当期純利益に与える影響はそれぞれ軽微であります。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
投資有価証券(株式)	3百万円	3百万円

※2 担保に供している資産およびこれに対する債務は次のとおりであります。

(イ) 担保に供している資産

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
預金	112百万円	112百万円
建物及び構築物	435	407
土地	2,038	2,038
計	2,586	2,557

(ロ) 上記に対応する債務

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
支払手形及び買掛金	21百万円	14百万円
1年内返済予定の長期借入金	35	24
長期借入金	40	16
計	96	54

※3 国庫補助金による有形固定資産の圧縮累計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
土地圧縮累計額	22百万円	22百万円

4 連結財務諸表提出会社は、運転資金の効率的な調整を行うため取引銀行13行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく連結会計年度末の借入未実行残高等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
当座貸越極度額の総額	30,500百万円	30,700百万円
借入実行残高	17,500	11,200
差引額	13,000	19,500

※5 連結会計年度末日満期手形

連結会計年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
受取手形	2,539百万円	2,422百万円

(連結損益計算書関係)

※1 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
	135百万円	34百万円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目および金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
運賃	2,763百万円	2,937百万円
貸倒引当金繰入額	244	△25
給料手当	1,799	1,890
賞与引当金繰入額	186	449
役員賞与引当金繰入額	56	55
退職給付費用	94	95
役員退職慰労引当金繰入額	37	29
減価償却費	687	593

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	26百万円	110百万円
組替調整額	△10	2
税効果調整前	15	112
税効果額	6	△7
その他有価証券評価差額金	21	105
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	△35	88
組替調整額	22	△82
税効果調整前	△13	5
税効果額	5	△2
繰延ヘッジ損益	△7	3
その他の包括利益合計	14	108

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成23年4月1日至平成24年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	21,244,830	—	—	21,244,830
合計	21,244,830	—	—	21,244,830
自己株式				
普通株式(注)	518,909	124	80	518,953
合計	518,909	124	80	518,953

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加124株は、単元未満株式の買い取りによる増加であり、減少80株は、単元未満株式の買増し請求による減少であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

① 平成23年5月13日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当金の総額	310百万円
1株当たりの配当額	15.00円
基準日	平成23年3月31日
効力発生日	平成23年6月27日

② 平成23年11月4日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当金の総額	248百万円
1株当たりの配当額	12.00円
基準日	平成23年9月30日
効力発生日	平成23年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの
平成24年5月15日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当の原資	利益剰余金
配当金の総額	207百万円
1株当たりの配当額	10.00円
基準日	平成24年3月31日
効力発生日	平成24年6月25日

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	21,244,830	—	—	21,244,830
合計	21,244,830	—	—	21,244,830
自己株式				
普通株式（注）	518,953	1	—	518,954
合計	518,953	1	—	518,954

（注）普通株式の自己株式の株式数の増加1株は、単元未満株式の買い取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

① 平成24年5月15日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当金の総額	207百万円
1株当たりの配当額	10.00円
基準日	平成24年3月31日
効力発生日	平成24年6月25日

② 平成24年11月5日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当金の総額	248百万円
1株当たりの配当額	12.00円
基準日	平成24年9月30日
効力発生日	平成24年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

平成25年5月15日の取締役会において、次のとおり決議しております。

株式の種類	普通株式
配当の原資	利益剰余金
配当金の総額	373百万円
1株当たりの配当額	18.00円
基準日	平成25年3月31日
効力発生日	平成25年6月24日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
現金及び預金勘定	1,769百万円	2,511百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△122	△112
現金及び現金同等物	1,647	2,399

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

車両運搬具であります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計処理基準に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、設備投資計画に照らして、必要な資金（主に銀行借入や社債の発行）を調達しております。一時的な余剰資金の運用については短期的な預金等に限定しております。運転資金については銀行等金融機関からの借入により資金を調達しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形および売掛金は顧客の信用リスクに晒されております。

投資有価証券は主として株式であり市場リスクに晒されております。

営業債務である支払手形および買掛金は、そのほとんどが6ヶ月以内の支払期日であります。

デリバティブ取引は、鉄鋼商品の輸入による外貨建予定取引の為替変動に対するヘッジとして、為替予約取引を行っております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は与信管理規程に沿って取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日および残高を管理するとともに財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減をはかっております。

デリバティブ取引については、取引相手先を高格付を有する金融機関に限定しているため、信用リスクはほとんどないと認識しております。

②市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

投資有価証券については市況や取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引については、社内規程に基づき、為替変動リスクをヘッジする取引を行っております。なお、デリバティブ取引の執行・管理については、当社のリスク管理方針に従って、ヘッジ対象の相場変動とヘッジ手段の相場変動を比較し、その変動額の比率によって有効性を判断しております。

③資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

当社は各部署からの報告に基づき担当部署が適時に資金繰り計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（注）2. 参照）。

前連結会計年度（平成24年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	1,769	1,769	—
(2) 受取手形及び売掛金	53,562	53,562	—
(3) 投資有価証券	684	684	—
資産計	56,016	56,016	—
(1) 支払手形及び買掛金	34,208	34,208	—
(2) 短期借入金	17,500	17,500	—
負債計	51,708	51,708	—
デリバティブ取引 (*)	11	11	—

(*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

当連結会計年度（平成25年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	2,511	2,511	—
(2) 受取手形及び売掛金	52,132	52,132	—
(3) 投資有価証券	740	740	—
資産計	55,384	55,384	—
(1) 支払手形及び買掛金	35,040	35,040	—
(2) 短期借入金	11,200	11,200	—
負債計	46,240	46,240	—
デリバティブ取引 (*)	16	16	—

(*) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法ならびに有価証券およびデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価については取引所の価格によっております。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照ください。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
非上場株式	82	82

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度（平成24年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	1,736	—	—	—
受取手形及び売掛金	53,562	—	—	—
合計	55,299	—	—	—

当連結会計年度（平成25年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	2,475	—	—	—
受取手形及び売掛金	52,132	0	—	—
合計	54,608	0	—	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度（平成24年3月31日）

	種 類	連結貸借対照表計上額（百万円）	取得原価（百万円）	差額（百万円）
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	585	345	239
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	585	345	239
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	99	110	△11
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	99	110	△11
合 計		684	456	227

(注) 非上場株式（連結貸借対照表計上額 82百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（平成25年3月31日）

	種 類	連結貸借対照表計上額（百万円）	取得原価（百万円）	差額（百万円）
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	730	389	341
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	730	389	341
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	9	10	△0
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	9	10	△0
合 計		740	400	340

(注) 非上場株式（連結貸借対照表計上額 79百万円）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）

種類	売却額（百万円）	売却益の合計額 （百万円）	売却損の合計額 （百万円）
(1) 株式	32	13	—
(2) 債券	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	32	13	—

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

種類	売却額（百万円）	売却益の合計額 （百万円）	売却損の合計額 （百万円）
(1) 株式	67	28	5
(2) 債券	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	67	28	5

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）

当連結会計年度において、有価証券について2百万円（その他有価証券の株式2百万円）減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ30%以上下落した場合には「著しく下落した」と判断して、その減損処理の対象としております。ただし、30%～50%の下落した銘柄については、その時価の回復可能性等を検討して、減損処理の要否を判定することとしております。

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

当連結会計年度において、有価証券について31百万円（その他有価証券の株式31百万円）減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ30%以上下落した場合には「著しく下落した」と判断して、その減損処理の対象としております。ただし、30%～50%の下落した銘柄については、その時価の回復可能性等を検討して、減損処理の要否を判定することとしております。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
前連結会計年度（平成24年3月31日）
該当事項はありません。

当連結会計年度（平成25年3月31日）
該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
通貨関連
前連結会計年度（平成24年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	為替予約取引				
	買建 米ドル	買掛金	499	—	11
合計			499	—	11

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成25年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	為替予約取引				
	買建 米ドル	買掛金	339	—	16
合計			339	—	16

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

連結財務諸表提出会社は、確定給付企業年金制度・退職一時金制度を、連結子会社の西日本スチールセンター株式会社および小野建沖繩株式会社は退職一時金制度、三協則武鋼業株式会社は退職一時金制度・中小企業退職金共済制度を採用しております。

2. 退職給付債務に関する事項

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
(1) 退職給付債務 (百万円)	△936	△1,060
(2) 年金資産 (百万円)	454	477
(3) 未積立退職給付債務 (百万円)	△481	△582
(4) 未認識数理計算上の差異 (百万円)	△1	86
(5) 前払年金費用 (百万円)	12	7
(6) 退職給付引当金(3)+(4)-(5) (百万円)	△495	△503

(注) 連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり簡便法を採用しております。

3. 退職給付費用に関する事項

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
退職給付費用(百万円)	106	102
(1) 勤務費用 (百万円)	96	90
(2) 利息費用 (百万円)	17	17
(3) 期待運用収益(減算) (百万円)	△4	△4
(4) 数理計算上の差異の費用処理額 (百万円)	△2	△1

4. 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

(1) 退職給付見込額の期間配分方法
期間定額基準

(2) 割引率

前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
2.0%	1.3%

(注) 期首時点で適用した割引率は2.0%でしたが、期末時点で再検討を行った結果、割引率の変更により退職給付債務の額に影響を及ぼすと判断し、割引率を1.3%に変更しております。

(3) 期待運用収益率

前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
1.0%	1.0%

(4) 数理計算上の差異の処理年数

1年(発生の翌連結会計年度に一括費用処理することとしております。)

(ストック・オプション等関係)

ストック・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	平成14年ストック・オプション	平成16年ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 4名 当社従業員 248名	当社取締役 6名 当社従業員 267名 当社子会社従業員 8名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 462,000株	普通株式 586,000株
付与日	平成14年8月5日	平成16年7月26日
権利確定条件	付与日(平成14年8月5日)以降、権利確定日(平成16年6月27日)まで継続して勤務していること。	付与日(平成16年7月26日)以降、権利確定日(平成18年6月25日)まで継続して勤務していること。
対象勤務期間	自 平成14年8月5日 至 平成16年6月27日	自 平成16年7月26日 至 平成18年6月25日
権利行使期間	自 平成16年6月28日 至 平成24年6月27日	自 平成18年6月26日 至 平成24年6月27日

(注) 株式数に換算して記載しております。

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(平成25年3月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

①ストック・オプションの数

	平成14年ストック・オプション	平成16年ストック・オプション
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末	—	—
付与	—	—
失効	—	—
権利確定	—	—
未確定残	—	—
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末	4,000	350,500
権利確定	—	—
権利行使	—	—
失効	4,000	350,500
未行使残	—	—

②単価情報

	平成14年ストック・オプション	平成16年ストック・オプション
権利行使価格 (円)	613	1,585
行使時平均株価 (円)	—	—
付与日における公正な評価単価 (円)	—	—

(税効果会計関係)

前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳	1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳
(百万円)	(百万円)
繰延税金資産	繰延税金資産
未払事業税	未払事業税
36	3
未払事業所税	未払事業所税
8	8
貸倒引当金	貸倒引当金
107	50
賞与引当金	賞与引当金
78	181
退職給付引当金	退職給付引当金
174	177
役員退職慰労引当金	役員退職慰労引当金
142	136
減損損失	減損損失
450	450
投資有価証券評価損	投資有価証券評価損
40	54
出資金評価損	出資金評価損
27	46
繰越欠損金	繰越欠損金
1,334	302
その他	その他
88	92
繰延税金資産小計	繰延税金資産小計
2,488	1,503
評価性引当額	評価性引当額
△1,950	△572
繰延税金資産合計	繰延税金資産合計
538	930
繰延税金負債	繰延税金負債
土地評価益	未収事業税
△27	△6
その他有価証券評価差額金	土地評価益
△80	△27
固定資産圧縮積立金	その他有価証券評価差額金
△249	△88
その他	固定資産圧縮積立金
△23	△247
繰延税金負債合計	特別償却準備金
△381	△19
繰延税金資産の純額	その他
156	△25
	繰延税金負債合計
	△414
	繰延税金資産の純額
	516
繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。	繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。
流動資産－繰延税金資産	流動資産－繰延税金資産
136	533
固定資産－繰延税金資産	固定資産－繰延税金資産
47	10
流動負債－繰延税金負債	固定負債－繰延税金負債
0	27
固定負債－繰延税金負債	
27	
2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳	2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳
(%)	(%)
法定実効税率	法定実効税率
40.4	37.8
(調整)	(調整)
評価性引当金の増減	評価性引当金の増減
△1.4	△1.1
のれん償却額	のれん償却額
1.7	1.7
交際費等永久に損金に算入されない項目	交際費等永久に損金に算入されない項目
0.7	0.6
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	受取配当金等永久に益金に算入されない項目
△0.1	△0.2
住民税均等割等	税務上の繰越欠損金の利用
1.3	△39.4
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	住民税均等割等
0.8	1.0
その他	税率変更による期末繰延税金資産の減額修正
△0.7	-
税効果会計適用後の法人税等の負担率	その他
42.7	0.2
	税効果会計適用後の法人税等の負担率
	0.6

(企業結合等関係)

共通支配下の取引等

1. 取引の概要

(1) 結合当事企業の名称及びその事業の内容

結合当事企業の名称 横浜鋼業株式会社
事業の内容 鋼材販売業

(2) 企業結合日

平成25年3月1日

(3) 企業結合の法的形式

当社を合併存続会社、横浜鋼業株式会社を合併消滅会社とする吸収合併

(4) 結合後企業の名称

小野建株式会社

(5) その他取引の概要に関する事項

当社の100%子会社である横浜鋼業株式会社は、昭和23年10月に設立以来、関西エリアを中心に業績を拡大し、北陸・中国・四国エリアまで営業網を確立しており、さらには、平成20年3月に当社の連結子会社、平成20年10月には当社の100%連結子会社となり、当社グループの一員として当社グループの鋼材販売事業において、関西エリアの中核会社として重要な役割を担っておりました。

また、当社大阪支店は、昭和58年8月に開設し、現在では関西エリアのみならず、北陸・中国・四国・中部エリアまで営業網を拡大しております。

このような状況、さらには、経済環境が激変するなかで、今後、当社グループとして競争力を一層高め、さらなる発展を遂げていくためには、当社大阪支店と横浜鋼業株式会社との間で重複している営業エリアを整理し、顧客に対するサービスの向上をはかり営業力をさらに強化する体制を構築する必要があると判断し、両社を一体運営（本合併）することといたしました。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」（企業会計基準第21号 平成20年12月26日）及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第10号 平成20年12月26日）に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(資産除去債務関係)

金額的重要性が乏しいため注記を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

当社におきましては、大分県その他の地域において、賃貸用の建物（土地を含む。）を有しております。前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は319百万円（賃貸収益は売上高に賃貸費用は売上原価に計上）であります。また、売却損益はありません。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は309百万円（賃貸収益は売上高に賃貸費用は売上原価に計上）であります。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
連結貸借対照表計上額		
期首残高	4,596	6,255
期中増減額	1,659	△582
期末残高	6,255	5,673
期末時価	8,997	8,136

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。

2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な増加額は賃貸用不動産への振替（1,828百万円）によるものであります。当連結会計年度の主な減少額は賃貸契約の解除（481百万円）によるものであります。

3. 期末時価は、固定資産税評価額に基づいた金額に合理的な調整を行って算定しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、主に鉄鋼・建材商品の販売および一部工事請負を国内各地域において行っており、各拠点において包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社は、販売体制を基礎とした地域別のセグメントから構成されており、「九州・中国」、「関西・中京」および「関東・東北」の3つを報告セグメントとしております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益（のれん償却前）ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）

(単位：百万円)

	九州・中国	関西・中京	関東・東北	合計
売上高				
外部顧客への売上高	80,271	38,017	29,654	147,942
セグメント間の内部売上高又は振替高	8,923	5,357	1,883	16,164
計	89,194	43,375	31,537	164,107
セグメント利益	1,515	264	814	2,594
セグメント資産	56,080	20,612	27,441	104,134
その他の項目				
減価償却費	586	129	451	1,166
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	29	28	17	76

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

（単位：百万円）

	九州・中国	関西・中京	関東・東北	合計
売上高				
外部顧客への売上高	81,269	37,704	31,024	149,998
セグメント間の内部売上高又は振替高	6,916	4,730	932	12,579
計	88,186	42,434	31,956	162,577
セグメント利益	1,851	646	800	3,298
セグメント資産	50,059	19,375	27,590	97,025
その他の項目				
減価償却費	514	115	382	1,012
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	85	44	20	149

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）

（単位：百万円）

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	2,594	3,298
セグメント間取引消去等	11	0
のれんの償却額	△110	△147
棚卸資産の調整額	1	6
連結財務諸表の営業利益	2,497	3,157

（単位：百万円）

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	104,134	97,025
セグメント間取引消去等	△11,131	△5,004
のれん	202	54
棚卸資産の調整額	△21	△15
全社資産（注）	10,375	7,405
連結財務諸表の資産合計	103,559	99,466

（注）全社資産は、主に当社の現金及び預金、管理部門に係る資産等であります。

（単位：百万円）

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度
減価償却費	1,166	1,012	—	—	—	—	1,166	1,012
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	76	149	—	—	—	10	76	160

（注）1. 有形固定資産および無形固定資産の増加額の調整額は、全社資産の設備投資額であります。

2. 全社資産の減価償却費については、合理的な基準に従い、対応する各報告セグメントに配分しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	鉄鋼・建材商品販売	工事請負	不動産賃貸等	合計
外部顧客への売上高	128,744	18,532	666	147,942

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	鉄鋼・建材商品販売	工事請負	不動産賃貸等	合計
外部顧客への売上高	127,087	22,265	645	149,998

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】
前連結会計年度（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）

（単位：百万円）

	九州・中国	関西・中京	関東・東北	合計
当期償却額	—	110	—	110
当期末残高	—	202	—	202

当連結会計年度（自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日）

（単位：百万円）

	九州・中国	関西・中京	関東・東北	合計
当期償却額	—	147	—	147
当期末残高	—	54	—	54

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
1株当たり純資産額	2,229.08円	2,369.37円
1株当たり当期純利益金額	72.88円	157.04円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	72.88円	157.04円

(注) 算定上の基礎は、以下のとおりであります。

1. 1株当たり純資産額

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当連結会計年度 (平成25年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	46,275	49,200
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	75	93
(うち少数株主持分(百万円))	(75)	(93)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	46,199	49,107
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の 普通株式の数(千株)	20,725	20,725

2. 1株当たり当期純利益金額および潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額

	前連結会計年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
当期純利益金額(百万円)	1,510	3,254
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る当期純利益金額(百万円)	1,510	3,254
期中平均株式数(千株)	20,725	20,725
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
当期純利益調整額(百万円)	—	—
普通株式増加数(千株)	0	0
(うち新株予約権(千株))	(0)	(0)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額の算定に含めな かった潜在株式の概要	平成16年6月25日定時株主総会決 議ストックオプション (新株予約権 350千個) 普通株式 350千株	—

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	17,500	11,200	0.22	—
1年内返済予定の長期借入金	35	24	1.90	—
1年内返済予定のリース債務	4	4	—	—
長期借入金(1年内返済予定のものを除く。)	40	16	1.90	平成26年
リース債務(1年内返済予定のものを除く。)	12	11	—	平成26年～29年
合計	17,591	11,256	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	16	—	—	—
リース債務	4	4	2	—

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	33,261	69,492	107,430	149,998
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	749	1,299	2,020	3,294
四半期(当期)純利益金額 (百万円)	452	786	1,234	3,254
1株当たり四半期(当期)純 利益金額(円)	21.82	37.97	59.58	157.04

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	21.82	16.14	21.61	97.46

2 【財務諸表等】
 (1) 【財務諸表】
 ① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※1 1,163	※1 1,817
受取手形	※5 24,331	※5 24,597
売掛金	※2 23,934	※2 24,399
商品及び製品	9,812	8,989
前渡金	3,533	2,287
前払費用	21	20
繰延税金資産	126	502
関係会社短期貸付金	5,928	3,211
その他	131	524
貸倒引当金	△246	△205
流動資産合計	68,735	66,143
固定資産		
有形固定資産		
建物	11,041	12,624
減価償却累計額	△4,704	△6,151
建物（純額）	6,337	6,472
構築物	3,308	4,207
減価償却累計額	△1,271	△2,187
構築物（純額）	2,036	2,020
機械及び装置	1,503	1,912
減価償却累計額	△925	△1,416
機械及び装置（純額）	578	495
車両運搬具	36	47
減価償却累計額	△27	△28
車両運搬具（純額）	9	18
工具、器具及び備品	187	240
減価償却累計額	△141	△201
工具、器具及び備品（純額）	45	39
土地	16,534	18,190
リース資産	12	23
減価償却累計額	△1	△8
リース資産（純額）	11	15
有形固定資産合計	25,552	27,252
無形固定資産		
ソフトウェア	40	29
その他	23	20
無形固定資産合計	63	50

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	752	809
関係会社株式	2,020	460
出資金	34	34
従業員に対する長期貸付金	31	30
破産更生債権等	470	126
長期前払費用	46	37
繰延税金資産	43	3
その他	286	304
貸倒引当金	△480	△126
投資その他の資産合計	3,205	1,680
固定資産合計	28,821	28,983
資産合計	97,557	95,126
負債の部		
流動負債		
買掛金	※1, ※2 30,357	※1, ※2 32,660
短期借入金	17,500	11,200
リース債務	2	4
未払金	431	419
未払費用	104	151
未払法人税等	470	50
前受金	2,380	973
預り金	29	21
前受収益	20	22
賞与引当金	166	425
役員賞与引当金	47	55
その他	218	222
流動負債合計	51,727	46,206
固定負債		
リース債務	9	11
退職給付引当金	443	461
役員退職慰労引当金	350	368
資産除去債務	58	58
その他	288	308
固定負債合計	1,148	1,209
負債合計	52,876	47,415

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,780	3,780
資本剰余金		
資本準備金	3,494	3,494
その他資本剰余金	14	14
資本剰余金合計	3,509	3,509
利益剰余金		
利益準備金	366	366
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	455	452
特別償却準備金	—	35
別途積立金	29,000	29,000
繰越利益剰余金	8,017	10,906
利益剰余金合計	37,839	40,760
自己株式	△602	△602
株主資本合計	44,526	47,447
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	147	252
繰延ヘッジ損益	7	10
評価・換算差額等合計	154	263
純資産合計	44,681	47,710
負債純資産合計	97,557	95,126

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
売上高		
商品売上高	133,252	135,141
その他の事業収入	742	721
売上高合計	133,995	135,862
売上原価		
商品売上原価		
商品期首たな卸高	8,280	9,812
当期商品仕入高	126,371	125,052
合計	134,651	134,865
商品期末たな卸高	※1 9,812	※1 8,989
商品売上原価	124,838	125,875
その他の事業費用	※2 414	※2 391
売上原価合計	125,253	126,267
売上総利益	8,741	9,595
販売費及び一般管理費		
運賃	2,066	2,228
貸倒引当金繰入額	213	△37
給料及び手当	1,526	1,644
役員賞与引当金繰入額	47	50
賞与引当金繰入額	164	414
役員退職慰労引当金繰入額	25	26
退職給付費用	76	78
減価償却費	623	542
その他	1,650	1,837
販売費及び一般管理費合計	6,393	6,784
営業利益	2,348	2,810
営業外収益		
受取利息	※3 27	※3 27
受取配当金	16	43
仕入割引	64	78
受取家賃	47	49
その他	101	85
営業外収益合計	257	284
営業外費用		
支払利息	41	32
売上割引	39	34
その他	0	1
営業外費用合計	81	68
経常利益	2,523	3,027

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
特別利益		
抱合せ株式消滅差益	—	288
その他	14	30
特別利益合計	14	319
特別損失		
投資有価証券売却損	—	5
投資有価証券評価損	—	30
出資金評価損	6	—
その他	3	0
特別損失合計	10	36
税引前当期純利益	2,527	3,310
法人税、住民税及び事業税	1,047	279
法人税等調整額	27	△345
法人税等合計	1,074	△66
当期純利益	1,453	3,377

③【株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	3,780	3,780
当期末残高	3,780	3,780
資本剰余金		
資本準備金		
当期首残高	3,494	3,494
当期末残高	3,494	3,494
その他資本剰余金		
当期首残高	14	14
当期変動額		
自己株式の処分	△0	—
当期変動額合計	△0	—
当期末残高	14	14
資本剰余金合計		
当期首残高	3,509	3,509
当期変動額		
自己株式の処分	△0	—
当期変動額合計	△0	—
当期末残高	3,509	3,509
利益剰余金		
利益準備金		
当期首残高	366	366
当期末残高	366	366
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金		
当期首残高	423	455
当期変動額		
固定資産圧縮積立金の積立	35	—
固定資産圧縮積立金の取崩	△3	△3
当期変動額合計	32	△3
当期末残高	455	452
特別償却準備金		
当期首残高	—	—
当期変動額		
特別償却準備金の積立	—	35
当期変動額合計	—	35
当期末残高	—	35
別途積立金		
当期首残高	29,000	29,000
当期末残高	29,000	29,000
繰越利益剰余金		
当期首残高	7,156	8,017
当期変動額		
固定資産圧縮積立金の積立	△35	—

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
固定資産圧縮積立金の取崩	3	3
特別償却準備金の積立	—	△35
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,453	3,377
当期変動額合計	861	2,888
当期末残高	8,017	10,906
利益剰余金合計		
当期首残高	36,945	37,839
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,453	3,377
当期変動額合計	893	2,921
当期末残高	37,839	40,760
自己株式		
当期首残高	△602	△602
当期変動額		
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
当期変動額合計	0	△0
当期末残高	△602	△602
株主資本合計		
当期首残高	43,632	44,526
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,453	3,377
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
当期変動額合計	893	2,921
当期末残高	44,526	47,447
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	128	147
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	19	105
当期変動額合計	19	105
当期末残高	147	252
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	14	7
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△7	3
当期変動額合計	△7	3
当期末残高	7	10
評価・換算差額等合計		
当期首残高	143	154

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	11	108
当期変動額合計	11	108
当期末残高	154	263
純資産合計		
当期首残高	43,776	44,681
当期変動額		
剰余金の配当	△559	△455
当期純利益	1,453	3,377
自己株式の取得	△0	△0
自己株式の処分	0	—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	11	108
当期変動額合計	905	3,029
当期末残高	44,681	47,710

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、平成10年4月1日以降取得した建物（建物附属設備は除く）については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	10～47年
構築物	10～47年
機械及び装置	5～12年
車両運搬具	4～6年
工具、器具及び備品	4～10年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。また、自社利用のソフトウェアについては社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権および破産更生債権等については、財務内容評価法によっております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、賞与支給見込額に基づき当事業年度負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

数理計算上の差異については、発生年度の翌事業年度に一括費用処理することとしております。

(5) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、役員退職慰労金内規に基づく期末要支給額を計上しております。

5. 収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

イ 当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事

工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

ロ その他の工事

工事完成基準を適用しております。

6. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

鉄鋼商品の輸入および輸出による外貨建予定取引の為替変動に対するヘッジとして、為替予約取引を行っております。

(3) ヘッジ方針

社内規程に基づき、為替変動リスクをヘッジする取引を行っております。

(4) ヘッジの有効性評価の方法

当社のリスク管理方針に従って、ヘッジ対象の相場変動とヘッジ手段の相場変動を比較し、その変動額の比率によって有効性を判断しております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税および地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております。

(表示方法の変更)

(損益計算書)

1. 前事業年度において、「営業外収益」の「その他」に含めていた「受取配当金」は、営業外収益の総額の100分の10を超えたため、当事業年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた1億17百万円は、「受取配当金」16百万円、「その他」1億1百万円として組み替えております。

2. 前事業年度において、独立掲記していた「特別利益」の「投資有価証券売却益」は、特別利益の総額の100分の10以下となったため、当事業年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「特別利益」の「投資有価証券売却益」に表示していた13百万円は、「その他」として組み替えております。

3. 前事業年度において、独立掲記していた「特別損失」の「固定資産除却損」は、特別損失の総額の100分の10以下となったため、当事業年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「特別損失」の「固定資産除却損」に表示していた3百万円は、「その他」として組み替えております。

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

(減価償却方法の変更)

当社は、法人税法の改正に伴い、当事業年度より、平成24年4月1日以後に取得した有形固定資産について、改正後の法人税法に基づく減価償却方法に変更しております。

これにより、従来の方法に比べて、当事業年度の営業利益、経常利益および税引前当期純利益に与える影響はそれぞれ軽微であります。

(貸借対照表関係)

※1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
預金	112百万円	112百万円

担保付債務は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
買掛金	21百万円	14百万円

※2 関係会社項目

関係会社に対する資産及び負債には区分掲記されたもののほか次のものがあります。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
流動資産		
売掛金	1,441百万円	410百万円
買掛金	1,770	1,011

3 保証債務

下記の関係会社の買掛金に対して、次のとおり債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
小野建沖繩株式会社	一百万円	92百万円

4 当座貸越契約

当社は、運転資金の効率的な調整を行うため取引銀行13行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
当座貸越極度額の総額	30,500百万円	30,700百万円
借入実行残高	17,500	11,200
差引額	13,000	19,500

※5 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当期の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
受取手形	2,059百万円	2,265百万円

(損益計算書関係)

※1 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
98百万円	18百万円

※2 その他の事業費用の内訳は次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)	
租税公課	108百万円	108百万円
減価償却費	203	185
給料手当	15	15
その他	87	81
計	414	391

※3 関係会社に対するものは次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)	
受取利息	26百万円	25百万円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数 (株)	当事業年度増加 株式数 (株)	当事業年度減少 株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
普通株式 (注)	518,909	124	80	518,953
合計	518,909	124	80	518,953

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加124株は、単元未満株式の買い取りによる増加であり、減少80株は、単元未満株式の買増し請求による減少であります。

当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首 株式数 (株)	当事業年度増加 株式数 (株)	当事業年度減少 株式数 (株)	当事業年度末 株式数 (株)
普通株式 (注)	518,953	1	—	518,954
合計	518,953	1	—	518,954

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加1株は、単元未満株式の買い取りによる増加であります。

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

車両運搬具であります。

② リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「3. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(有価証券関係)

子会社株式および関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式460百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式2,020百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳	1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳
(百万円)	(百万円)
繰延税金資産	繰延税金資産
未払事業税	未払事業所税
33	6
未払事業所税	貸倒引当金
6	48
貸倒引当金	賞与引当金
76	160
賞与引当金	退職給付引当金
62	161
退職給付引当金	役員退職慰労引当金
153	130
役員退職慰労引当金	減損損失
124	450
減損損失	投資有価証券評価損
450	51
投資有価証券評価損	出資金評価損
40	46
出資金評価損	繰越欠損金
27	302
その他	その他
65	82
繰延税金資産小計	繰延税金資産小計
1,041	1,441
評価性引当額	評価性引当額
△518	△548
繰延税金資産合計	繰延税金資産合計
523	893
繰延税金負債	繰延税金負債
その他有価証券評価差額金	未収事業税
△80	△6
固定資産圧縮積立金	その他有価証券評価差額金
△249	△88
その他	固定資産圧縮積立金
△23	△247
繰延税金負債合計	特別償却準備金
△353	△19
繰延税金資産の純額	その他
169	△25
繰延税金資産の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれております。	繰延税金負債合計
流動資産－繰延税金資産	△386
126	繰延税金資産の純額
固定資産－繰延税金資産	506
43	繰延税金資産の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれております。
	流動資産－繰延税金資産
	502
	固定資産－繰延税金資産
	3
2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳	2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳
(%)	(%)
法定実効税率	法定実効税率
40.4	37.8
(調整)	(調整)
評価性引当金の増減	評価性引当金の増減
0.0	△0.1
交際費等永久に損金に算入されない項目	交際費等永久に損金に算入されない項目
0.7	0.5
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	受取配当金等永久に益金に算入されない項目
△0.1	△0.2
住民税均等割等	抱合せ株式消滅差益
1.2	△3.3
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	子会社合併による引継ぎ繰越欠損金
0.8	△37.7
その他	住民税均等割等
△0.5	1.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	税率変更による期末繰延税金資産の減額修正
42.5	-
	その他
	0.0
	税効果会計適用後の法人税等の負担率
	△2.0

(企業結合等関係)

連結財務諸表「注記事項（企業結合等関係）」に記載しているため、注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

金額的重要性が乏しいため注記を省略しております。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
1株当たり純資産額	2,155.81円	2,301.99円
1株当たり当期純利益金額	70.12円	162.93円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	70.11円	162.93円

(注) 算定上の基礎は、以下のとおりであります。

1. 1株当たり純資産額

	前事業年度 (平成24年3月31日)	当事業年度 (平成25年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	44,681	47,710
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	44,681	47,710
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の 普通株式の数(千株)	20,725	20,725

2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額

	前事業年度 (自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日)	当事業年度 (自 平成24年4月1日 至 平成25年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
当期純利益金額(百万円)	1,453	3,377
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る当期純利益金額(百万円)	1,453	3,377
期中平均株式数(千株)	20,725	20,725
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
当期純利益調整額(百万円)	—	—
普通株式増加数(千株)	0	0
(うち新株予約権(千株))	(0)	(0)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額の算定に含めな かった潜在株式の概要	平成16年6月25日定時株主総会 決議ストックオプション (新株予約権 350千個) 普通株式 350千株	—

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄		株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	
投資有価証券	その他有価証券	大阪製鐵(株)	129,800	209
		(株)肥後銀行	242,000	145
		(株)西日本シティ銀行	368,271	108
		(株)ふくおかフィナンシャルグループ	138,672	66
		(株)奥村組	107,000	39
		三協立山(株)	18,600	35
		(株)大分銀行	80,268	28
		宮脇鋼管(株)	5,000	25
		(株)南陽	36,730	21
		(株)コーヨー九州	28	14
	その他24銘柄	406,984	115	
計		1,533,353	809	

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価償却累計額又は償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	11,041	1,598	15	12,624	6,151	338	6,472
構築物	3,308	899	0	4,207	2,187	174	2,020
機械及び装置	1,503	408	—	1,912	1,416	156	495
車両運搬具	36	21	10	47	28	12	18
工具、器具及び備品	187	54	2	240	201	16	39
土地	16,534	1,656	—	18,190	—	—	18,190
リース資産	12	11	—	23	8	3	15
有形固定資産計	32,624	4,650	28	37,246	9,993	701	27,252
無形固定資産							
ソフトウェア	—	—	—	162	133	24	29
その他	—	—	—	51	30	2	20
無形固定資産計	—	—	—	213	163	26	50
長期前払費用	54	7	19	42	4	1	37

(注) 1. 無形固定資産の金額が資産総額の1%以下であるため「当期首残高」、「当期増加額」および「当期減少額」の記載を省略しております。

2. 当期増加額には、平成25年3月1日に横浜鋼業株式会社を吸収合併したことによる増加額が次のとおり含まれております。

有形固定資産

建物	1,590百万円
構築物	899百万円
機械装置	341百万円
器具備品	45百万円
土地	1,656百万円
リース資産	7百万円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	726	254	348	301	332
賞与引当金	166	425	166	—	425
役員賞与引当金	47	55	42	4	55
役員退職慰労引当金	350	26	8	—	368

(注) 1. 貸倒引当金の当期減少額「その他」の内、246百万円は洗替による戻入れであり、54百万円は債権回収による取崩しであります。

2. 役員賞与引当金の当期減少額「その他」は前期末残高に対する支給額との差額戻入額であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

① 流動資産

イ 現金及び預金

区分	金額 (百万円)
現金	27
預金の種類	
当座預金	1,660
普通預金	16
別段預金	1
定期預金	112
小計	1,790
合計	1,817

ロ 受取手形

相手先別内訳

相手先	金額 (百万円)
九鉄工業(株)	438
五洋建設(株)	438
(株)エムオーテック	277
(株)ヤマサ	235
藤原鋼材(株)	206
その他	23,000
合計	24,597

期日別内訳

期日	金額 (百万円)
平成25年3月	2,265
4月	6,420
5月	5,711
6月	5,221
7月	4,324
8月	635
9月以降	17
合計	24,597

ハ 売掛金
相手先別内訳

相手先	金額（百万円）
岩永工業(株)	576
大和ハウス工業(株)	465
片山ストラテック(株)	298
(株)フロンティア・サンワ	286
九鉄工業(株)	263
その他	22,508
合計	24,399

売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 （百万円）	当期発生高 （百万円）	当期回収高 （百万円）	当期末残高 （百万円）	回収率（%）	滞留期間（日）
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A)+(B)} \times 100$	$\frac{(A)+(D)}{2}$ $\frac{(B)}{365}$
23,934	142,125	141,660	24,399	85.31	62.07

(注) 当社は、消費税等の会計処理については税抜方式を採用しておりますが、上記金額につきましては消費税等が含まれております。

ニ 商品及び製品

品名	金額（百万円）
鋼板類	2,776
条鋼類	5,030
丸鋼類	1,138
建機商品	43
合計	8,989

ホ 関係会社短期貸付金

区分	金額（百万円）
西日本スチールセンター(株)	1,290
三協則武鋼業(株)	1,397
小野建沖繩(株)	510
(有)ブライト	14
合計	3,211

② 流動負債
 イ 買掛金
 相手先別内訳

相手先	金額（百万円）
日鐵商事(株)	4,200
合鐵産業(株)	2,657
三井物産スチール(株)	1,914
伊藤忠丸紅テクノスチール(株)	1,728
住金物産(株)	1,075
その他	21,084
合計	32,660

ロ 短期借入金

相手先	金額（百万円）
(株)福岡銀行	3,300
(株)西日本シティ銀行	2,300
(株)大分銀行	1,700
(株)北九州銀行	1,100
(株)肥後銀行	600
(株)広島銀行	600
(株)西京銀行	400
その他 5 行	1,200
合計	11,200

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 福岡県福岡市中央区天神2丁目14番2号 日本証券代行株式会社 福岡支店
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都中央区日本橋茅場町1丁目2番4号 日本証券代行株式会社
取次所	_____
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他のやむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利ならびに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第63期）（自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日）平成24年6月25日九州財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成24年6月25日九州財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

（第64期第1四半期）（自 平成24年4月1日 至 平成24年6月30日）平成24年8月10日九州財務局長に提出。

（第64期第2四半期）（自 平成24年7月1日 至 平成24年9月30日）平成24年11月13日九州財務局長に提出。

（第64期第3四半期）（自 平成24年10月1日 至 平成24年12月31日）平成25年2月13日九州財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

平成24年6月27日九州財務局長に提出。

金融商品取引法第24条の5第4項および企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書であります。

平成25年1月21日九州財務局長に提出。

金融商品取引法第24条の5第4項および企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第7号の3の規定に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成25年6月21日

小野建株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 森 行一 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮本 義三 印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている小野建株式会社の平成24年4月1日から平成25年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、小野建株式会社及び連結子会社の平成25年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、小野建株式会社平成25年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、小野建株式会社が平成25年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表に添付する形で別途保管しております。
 2. 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成25年 6月21日

小野建株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 森 行一 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 宮本 義三 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている小野建株式会社の平成24年4月1日から平成25年3月31日までの第64期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、小野建株式会社の平成25年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2. 財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	九州財務局長
【提出日】	平成25年6月24日
【会社名】	小野建株式会社
【英訳名】	ONOKEN CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 小野 建
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大分県大分市大字鶴崎1995番地の1
【縦覧に供する場所】	小野建株式会社小倉支店 (北九州市小倉北区西港町12番地の1) 小野建株式会社大阪支店 (大阪市西区九条南二丁目24番20号 九条STビル) 小野建株式会社東京支店 (東京都中央区八重洲一丁目3番22号 八重洲龍名館ビル2F) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 証券会員制法人福岡証券取引所 (福岡市中央区天神二丁目14番2号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長小野建は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用している。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものである。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全に防止又は発見することができない可能性がある。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告にかかる内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成25年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠した。

本評価においては、財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定している。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行った。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、会社並びに連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定した。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び連結子会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定した。なお、連結子会社2社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めていない。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している1事業拠点を「重要な事業拠点」とした。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金、及び棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象とした。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加している。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断した。

4 【付記事項】

付記すべき事項はない。

5 【特記事項】

特記すべき事項はない。